
ETARNIA STORY

天驅ける翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ETARNIA STORY

【Zコード】

N7072J

【作者名】

天駆ける翼

【あらすじ】

世界は相変わらずそこにある。

私立帝学園に通う高校生、鳴月龍斗は賑やかな家族や学友に囲まれて充実した日々を過ごしていた。こんな日常がいつまでも続く、そう思っていた。……あのときまでは

妹である鳴月遥香の突然の失踪、帝グループの暗躍、鳴月家の秘密、そして異世界「エターニア」の存在。混乱の中、龍斗は妹の失踪の手掛かりを求めて異世界へと足を踏み入れる。複雑に絡み合った運命の果てに辿り着いたとき、彼の眼に映つたものとは……

* * この作品は『学園編』と『ETARZIA編』の一つのパートがあります。まずは『学園編』から始まるので、そのつもりでよろしくお願いします。 * *

1・1・強烈の理由

あれは確か八年前、もつ日が沈みかけようとしている時間帯のころだった。

門限である五時を一時間ほど過ぎて家に帰った僕にかけられた言葉は「おかれり」でも「遅い」でもなく、こんな言葉だつた。

「龍斗か。遙香がどこに行つたか知らないか。まだ帰つてこないんだ」

父さんのこの言葉を聞いたとき、なぜかとてもいやな予感がした。妹の遙香は両親の言うことをよく聞くいい子だつた。

妹が両親との約束を破つたことは、僕の知る限りでは一度もない。そんな妹が門限を一時間も過ぎているのにまだ帰つていない。

何かあった。

なぜそう思ったのかわからない。証拠があるわけでもないのに遙香に何かあったという妙に確信に近い感覚が僕を支配していた。気づいた時には、僕はもう来た道を走りだしていった。

* * *

「お嬢ちゃん、ちょっとといいかな？」

私がいつものように公園であそんでいたら、二つの間にか田の前

に知らないおじさんがいた。

わら、と私は首を動かさずに田線だけを上げてそのおじさんの顔を盗み見る。

なんでだらう、とびきりの笑顔で笑っている。

……どうしよう、知らない人に声かけられちゃった。お母さんが知らない人と話しかや駄目つていってたし、……無視しかやおう。

「……」

お母さんとの約束を守つて無視をすると、またおじさんに声を掛けられた。

「あれえ、無視しちゃうんだ。ねえ、ちょっとボクとお話ししようよ」

……この人きもちわるい。そう思つて私は立ちあがつた。
もうすぐ五時になる。お母さんとの約束だし、もう帰らう。
おじさんのことを無視して横をすり抜けようとする。

「お話をうつして言つてるの。」無視して行つちゃうんだ。へえ。
……ね、ね、お嬢ちゃん、ちょっといいかな、いこよね、ね

がしき とこきまり右腕をつかまれた。おじさんはそのまま私を引きずるようにして公園の入り口に止めてある黒いワゴンの方へ歩いていこうとする。

連れて行かれる！

「いやっ！ 放して！…」

とつさに腕を振りほどく。いつもがくが、相手は大人。振りきれるはずもない。

それでも必死にもがいていると、おじさんがポケットから何かを取り出すのがみえた。

「いや……、いやっ！」

必死に叫ぶ私の口に何か布のような物が押し当たられる。瞬間、ぐらりと視界が歪む。

（……助けて、だれか……、お母さん　お父さん　お兄、ちや…）

⋮

助けを求める声は誰にも届かず、そして世界は闇に染まる。

* * *

とつさに思い浮かんだのは公園、遙香はいつもあそこで遊んでいた。今日もきっとあそこにいるはず。

大丈夫、きっと。夢中で遊んでいて時間をみていないだけだ。

きっとそうだ。やうなんだ。

……そのはずなのに、いやな予感が消えない。心の中にそんなわけがないと言つていい自分がいる。

何かあった　なにか、とてもよくないことが……

やけにいつもより遠く感じた公園の入り口をくぐり、暗くなり始めた公園の隅々まで目を凝らす。

いつも通りの公園がそこにある。シーソー、滑り台、ブランコ、鉄棒、ジャングルジム、すべてがいつも通り。なにもおかしいところ

ろはない。

遥香がいない。それ以外は、なにも。

いない、どこを探してもいない。おかしい、そんなはずはない。
ここにいるはずなんだ、ここに。

田の前の光景が理解できない。いなはばずがないのだ。ここ以外
に僕は知らない。

きつとどこかにいる、隠れているんだ。そつ、隠れている……
どこに？ わからない……。

「 遥香？ …… どこにいる？ 遥香？」

名前を呼びながら必死になつて遥香の姿を探す。いな、さがす、
いな、さがす。あ！ あれは……

遥香の着けていた 赤いマフラー

視界が真つ暗になる。これまで予感でしかなかつたものが確信に
変わる。

本当に何かあった、あつたのだ、ここで。この場所で、遥香に
何か、そつ、何かとてもよくないことが。

視界が戻つてくる。手には遥香の赤いマフラー、そして理解、遥
香が危ない。

この状況で僕が取るべき行動はただひとつ。マフラーが地面に落
ちる。

公園を出るの躊躇取りに迷いはない。場所ならわかる。

遥香が、呼んでる

* * *

背中にひんやりと固い感触を感じて田が覚めた。どうやら床に寝ているようだ。いつ寝たんだっけ？

体を起してあたりを見回す。ここは一体どこだらう。たしか私は公園で遊んでいたはず……

そして……そうだ、知らないおじさんに声を掛けられて……

「ひつ……」

思い出した。あのおじさんに連れていかれたんだ。
じゃあ、ここは、ここには……

「やあ、気がついたかい？」

突然暗闇のほうから声がした。どこかで聞いた声……あのおじさんだ。

その表情は公園で声をかけられた時と全く変わっていない。ただ、笑顔。

びくつと体がこわばる。怖い、笑っているはずなのに……な

んだかわからないけど、とても怖い。

「ひどいなあ、そんなに怖がらなくとも、ボクはショックだよ？」

「……」

「ふふっ やっぱり無視なんだね。まあここの人に連れてこれたんだし。やつと二人きりだね。ねえ、お父さん、いるよね。そりゃあいるよね、うん。知ってるよ。お譲りやん鳴月んとこの子だよね。うん、知ってる。……ちよつと失礼」

そう言つておじさんは私の方に手を伸ばしてくる、反射的に肩を抱きながら後ずさりとして……

ところへ背中が壁に当たる。「うわ……逃げられない……以前におじさんの手。『めっ』と田をつぶる。そしておじさんの手が私の体に触れて……離れた。

「？」

なにもされてない？ 憮れ慇れ田をあけぬべ、おじさんの手には私の携帯が握られていた。

「そうそう、これこれ。これがほしかったんだよ。いやあ、持つてくれてありがとう。便利だよね、携帯って」

しまつた。携帯を奪われた。これで外に連絡する手段は完全に断たれたといつてもいい。

助けは来ない。 絶望的。

「じやあボクはちょっと電話していくから。さうでまつてね。」
「逃げちゃだめだよ？」

もう言つておじわんは奥の方へ姿を消した。ちょっととして奥の方からかすかに携帯を操作する音が聞こえてくる。……本当に電話しているらしい。

逃げるなら今しかない、そう思つた。逃げるなと言われたけどもんなわけにはいかない。

恐怖でこわばる体をゆっくりと動かして出口をさがす。
幸い出口はすぐ見つかった。ゆっくりと音をたてないようにドアを回してみる。……開いた！

足音をたてないように注意して部屋から出る。……成功。どうやらこの部屋は一階にあつたらしく、端の方に階段が見えた。ゆっくりと階段を下りる。……大丈夫。周りを見回してみると、玄関はすぐに見つかった。

出られる！

もうおもつて氣を抜いたのが悪かつたのか、一階の方で バタン
とドアの閉まる音が聞こえた。

一人きり わたしかにおじわんはもう言つてこた。つまりつきの音の主は……

まずい！

急いで玄関のドアを開けようとする。しかし……

「なんで！！ 開かない！！」

「くらノブを回してもドアは開かない。いやな汗が噴き出していく。

る。

焦る、開かない、どうして…… そつだ！鍵！！

気づいてすぐさま鍵を開けようと手を伸ばし カチリ と手元で音がしたところで、

「逃げちゃ駄目って言つたじゃなーか」

今までとは違ひ、低く唸るよつた声を出すおじさんに腕を掴まれた。

1・2・強さの理由

* * *

公園を出た後、僕はある場所を目指して走っていた。

目指す場所はとある廃屋、僕たちの間で隠れ家として利用している場所だ。

あそこなら公園からも近いし、あまり人も寄り付かない。何よりそこで遙香が呼んでいるような気がしたのだ。

遙香はあそこにいる

確証は何一つないが、やらないうりはまし。僕はただ走る。次の角を左に曲がって……

ついた!! 地面にはまだ新しい大きな靴跡が残っている。ここだ。遙香はここにいる。

そして……気づいた。ここに入つて行つたところで、僕に一体何ができる?

子供の僕では大の大人には抵抗できない。つまりここに来たのはまったくの無意味。

ここにきて自分の無力を痛感させられる。目の前のドアを開ければ遙香がいる。

でも、はいって行つたところで何もできない。助けたい。でも、できない。

そうなれば誰か大人に助けを求めに行くのが賢明なんだろう。でも、それもする気にならない。

田の前に遙香はいるのだ。ここでこの場から離れることは逃げることにはならないだろうか。いや、逃げるためじゃない、助けるた

めに離れるんだ。でも……、こやぢひぱみ

考えがまともらない。今この瞬間も遙香は怖い田にあつているかもしれないのに。

僕と遙香を隔てている、色のはげたドア。田の前にあるはずのドアが、やけに遠く、そして厚い。

どうすればいい、どうすれば……

「やめて！ 放して！ いやつ……！」

不意にドアの向こうから悲鳴が聞こえる。聞いたことのある想…

…遙香だ！！

遙香が危ない。その悲鳴を聞いた瞬間、僕の心はもう決まりた。ドアのノブに手をかけて思い切り引く、中に見えたのは一つの身影。そのうちの一つは……

「遙香……」

姿を確認して思わず名前を叫ぶ。まずは田にはいったのは妹の驚いた顔と頬に光る一筋の涙。そして遙香の手がつかまれているのが視界に入った。

瞬間、思考が蒸発する。

「遙香を放せ……」

相手の顔も見ずに、遙香の手首をつかんでいる人影にむかって体当たりをかました。

思つてもいな~~い~~反撃に人影は後ろに倒れこむ。そして遙香をつかむ手が離れて……

「逃げるぞーー 遥香ーーー」

妹の小さな手をしつかりとつかんで、僕は走り出した。

* * *

おじさんには手首をつかまれて、私はまた言いようのない恐怖に駆られた。

おじさんの目がいままでのように笑っていない。怖い、これはなんか本気だ。

そう思つたら体がこわばつていふことを聞いてくれなくなつた。まずい、動け！動け！

どれだけ念じても体はいうことを聞いてくれない。

「逃げちゃ駄目って言つたじゃないか」

ああ、もうだめだ、これは助からない。

そう悟つた時、始めて浮かんできた顔は

(お兄ちゃん……)

いつも私と遊んでくれたお兄ちゃん、いつも笑わせてくれた、泣

いてる時は泣きやむまでそばにいてくれた、落ち込んでいるときは励ましてくれた。いつも私の隣にいてくれた、お兄ちゃん。

(最後に、会いたかったな……)

ふいに涙が一筋こぼれおちる。それをきっかけに体の自由がわずかに戻つてくる。

……会いたい。そう強く願う。

あ、まだいける……動ける！

それでも体を動かす程の力は戻つていない。それならば、最後の悪あがきは……

「やめて！ 放して！ いやっ！－！」

力いっぱい叫んだ。これでだれも気づいてくれないならそれでもいい。いや、この際だれでもいい、

だれか、私を助けて……

ドアが勢いよく開けられたのはその瞬間だった。いきなり開いたドアに驚いて、

そしてそのまま立っていた人の顔に何よりも驚いて、

「遙香……」

久しぶりに名前を呼ばれた気がした。

* * *

来た道を遙香の手を引いて走る。遙香も脚の速さの違いに必死についてきている。

「遙香、大丈夫か？」

返事はない。けれど「クク」と首を縦に振っているところを見るとい、まあ大丈夫なんだろう。

……あのときはるかの悲鳴が聞こえてなかつたら、きっと僕はあの場から逃げ出していた。

力がないから、逃げたくないから、一いつの思考の狭間で押しつぶされていた。

あの瞬間、確かに僕は遙香を助けたかもしれないが、同時に僕も遙香に助けられていたのだ。

まったくどっちが助けられたのか分かんないな・・・

走りながら遙香に見えないよう苦笑する。

その時、

「おい、なに逃がしてくれちゃってんのよ。勝手に連れてくんじゃねえよ」

背筋が凍るような声を背後から浴びせられた。

おもわず立ち止まって後ろを振り返る。そうせずにはいられない

「ううーーー！」

ほどの声色だつた。

そこにせきりつき遙香の隣にいた奴が立っていた。田が血走っている。

「だめだ、こいつ、正氣じゃない。」

見た瞬間に分かる。あれは正氣じゃない。そして正氣を失つてい る奴は何をするかわからない。

万が一の時には、遙香だけでも……

遙香を背にかばつて男を見つめ返す。

「なあ、勝手に連れてくんじゃねえよ。何様だお前、あ？ 正義の味方ぶりやがつて、気持ち悪い。」

お前みたいな奴、嫌いなんだよね。つてことで、「

そこで男は言葉を切る。そして……

「死ねば？」

こきなりポケットからサバイバルナイフを取り出して切りかかつ てきた。

「うつ……」

とつれに遙香をかばつくりにして抱きしめる。せめて遙香だけでも、そうおもつて強く、強く。

腕の中で遙香が息をのむのがわかつた。大丈夫だ。お前は僕が守つてやるから。

「めんな、こんな兄で。妹さえくつ守つてやれない兄で、『め

んな。

最後に遙香に笑いかけてやる。……つまく笑えただろうか？
そして覚悟を決め、目を閉じる。

サバイバルナイフが龍斗の体に迫る。そして……

「たひせへや」

若い男の声の後に、絶叫がこだました。ただし、それはどちらも龍斗の発したものではない。

絶叫は腕の骨をへし折られた男のものだつた。

恐る恐る田をあける。まず田に入つたのは地面に転がつてゐるサバイバルナイフ、背筋が凍る。そして そのすぐ隣には地面でうずくまつてうめいている男の姿。
じゃあその横に立つてるのは……

「「お父さん!!」」

龍斗と遙香が同時に叫ぶ。

「一人とも怪我はないか？」
もう大丈夫だよ、僕がついている

いつも通りの、本当にいつも通りのお父さんがそこにいた。

*

*

*

あの日、俺はかたくこころに誓つたんだ。

強くなつて見せる

大切なものを自分の手で守れるよつこ

遙香をこの手で守れるよつこ

もう一度とあんな思いはしたくないから

2・1・始まりの一日

まだ日が昇るには早い時間、西の空に静かに輝く満月が一つの人影を照らし出す。

森、たくさんの木々が乱立するその場所に、少年と老人は向かい合つて立っていた。

「ふおっふおっふおっ。どうしたんじや？ 動きが鈍くなつとるぞ、もうバテたのか？」

その言葉を放つた老人は、歳を全く感じさせない動きで大きく一步を踏み込み、少年の懷に潜り込んできた。少年はとつさに距離を取るために体を動かそうとする。が、長時間酷使を続けた体はその反応をわずかに遅れさせてしまう。

ほんの一秒にも満たないその一瞬が、老人にとつては十分すぎる隙となる。

老人の膝が、少年の腹部に突き刺さる。純粹な打撃攻撃 跳り。たつたそれだけのことなのに少年の体は十メートル以上も後方へ吹き飛び、地面にたたきつけられる。

「！」、「ふ……」

肺の空気をすべて持つて行かれる。つまく呼吸ができない。跳られた、そのことを理解するのに数秒を必要とした。

自分が今どんな体制でいるのかさえ分からなくなる。立たなくてはいけない、それなのにどこにどう力を入れたら立ち上がるのかがわからない。

まづい、追撃が来る。今に老人が目の前に現れて……

来ない、追撃が、来ない。

おかしい、なぜ攻撃して来ない？ 疑問、無理やり痛みを抑えつけ老人を探す。その姿はすぐに見つかった。

さつき膝を入れられた場所、そこに老人は構えをとることもなくただ立っていた。目線はこちらを向いている。顔に冷笑を浮かべて。
……野郎、笑つてやがる。そのことに少年は奥歯をかみしめる。

手加減

明らかに手加減をされている。いや、それは始める前からすでにわかつっていたことだ。もとから勝てるなどとは思っていない。しかしここまで一方的にやられるとも思つていなかつた。

少年が全身にあざや切り傷ができておりすでに立つているのがやつとの状態であるのに対して、老人のほうは傷一つないばかりか息一つ乱していない。

実力の差は明らかだった。手加減して、それでもまだそれだけの余裕がある老人を相手に、どうあがこうと今の少年では太刀打ちできない。むしろこれだけの攻撃を受けて意識を保っていたこと自体が奇跡なのだ。ここからの逆転など絶対に不可能。

でも、ここでみすみす負けを認めるつもりも、ない。

やつとの思いで起き上がると、関節が悲鳴を上げた。体中が痛み

を訴えかけてくる。もう立つな、もう十分頑張った、心が折れそうになる。でも、それでも、諦めるわけにはいかないない。まだ動けるんだ、倒れるにはまだ早い。完全につぶれてだめになるまでがいてやるんだ。

「大切なものを守りたいから。そのための力がほしいから。」

少年は立ち上がって正面から老人を見据える。その体が風もないふらふらと左右に揺れる。立っているのがやっとの状態で、もう四肢の感覚すら失いつつありながらも、それでも心だけは決して揺らがない。その瞳に宿る光だけは、絶対に失うことはない。

「ほう……、まだ立ち上がるか。もういいんじゃないか？ お前さんは十分頑張ったんじゃ。もう立っているのも精一杯なんじゃろう？」

「つるせえ、まだ諦めるわけには、いかねえんだ。ここで倒れるわけには、いかない！」

「威勢だけはいいようじやがそれだけでわしにまどかんよ。しかし、そうか……そこまでの覚悟があるんじゃつたら……、ふむ、そうじやな！」

老人は少し考えるより前に口元でいつたん言葉を切って、その顔から冷笑が消える。

「手加減をするのは、無粋といつものじやうひ！」

老人の放つ殺気が、一瞬で今までとは比べ物にならないほどに膨

れ上がった。

「つづーーー」

全身からいやな汗が流れ出す、筋肉が疲労と緊張で硬直する、呼吸が乱れる、肺が正常に機能してくれない、頭が真っ白になる、なにも考えることができない。

殺される

はじめて感じた死の恐怖は、耐えがたい衝撃を空白の頭に叩きつけてくる。

自分は一体何をしている？ 一体どこにいる？ あれは一体何だ？ なぜ自分を狙っている？

わからない、目の前には老人、世界には俺と老人しか存在しないかのような錯覚。

先ほどからまるで人形にでもなったかのように動かない老人。そして……

老人の姿が、視界から消えた。

何も考えられないまま、ただ直感に従つて全力で右に跳ぶ。

ぶんっ と、自分の左側から風を切る音が聞こえた。目を向けると、そこにはちょうどさつきまで自分が立っていた空間、老人の右拳が突き刺さっている。

やばい、この老人、本気だ。本気で殺ろうとしている。

思考が戻つてくると同時に、少年は老人から距離をとろうと後方へ飛び下がる。しかし老人はまるでそれを知っていたかのようにぴ

つたりと張り付いてくる。老人は伸びきった右腕を引き戻しながら、上半身をひねって右足を振り上げる。

……回避は間に合わない。ならば防御するしか道はない。両手を顔の前にクロスして、距離を取り損ねたせいで不安定になつていてる体制のまま老人の蹴りを受け止める。

ゴツ　と骨同士がぶつかり合つ鈍い音が辺りにこだまする。

そのまま後ろに吹き飛びそうになるが、なんとか体制を持ち直す。両手に伝わるあまりの衝撃に少年は激痛で顔を歪める。

次の瞬間、老人の姿はもつそこにはなかつた。

「どこに……

姿をとらえようと視線をさまよわせたところで、

「甘い」

田の前に老人の姿、下から上に突き上げるように鳩尾へ一撃

くの字に折れ曲がる身体、両足が地面を離れる
全身を駆け巡る衝撃、体中から力が抜ける
搖さぶられる脳、思考能力が停止する
明滅する視界、世界が暗転する

薄れゆく意識の中で最後に視界に入ったものは、敵に向けるものではないやさしさに満ちた微笑み。

慈愛に満ちた表情をしている、老人の顔だった。

* * *

目が覚めて最初に目に入ったのは見慣れた天井。……いつ帰ってきたんだっけ、思い出せない。まだ頭がぼんやりとしている。

ゆっくりと体を起して何度も瞬きをしていると、膝の辺りで、腕に顔をうずめて静かに寝息を立てている人の姿が目に入った。

「遙香？」

そうつづぶやくと、遙香は もぐつ とわずかに体を動かしてから、ゆっくりと顔をあげた。

ぼーっとこちらを見つめている。焦点が合っていない。……寝ぼけているんだろうか？

徐々にその焦点が俺に向わさっていく。ぴったりと目があつた瞬間、いきなり遙香は俺に抱きついてきた。

「お兄ちゃん！ 田が覚めたんだ！ よかつた、おじこちゃん、傷だらけのお兄ちゃんを抱えて帰つてくるんだもん。……すゞく心配したんだから」

俺はどうやら遙香を心配せてしまつたらしい。いけないな、これからはもう少し考えてから行動しなくちゃ……

「遙香、心配してくれてありがと、でも、やひそろ離れてくれないかな、ちょっと苦しい」

「あー、うそ、『めんね』

そうこうと遥香は素直に俺を開放して、ベッドの横にあった椅子に腰かける。

顔はじーっとこちらを向いたまま。……よく見ると頬に涙の跡がある。黙る前に相当泣いたんだね。まだ目が充血している。

ズキリと心が痛む。遥香を泣かせてしまった。その事実が俺の心に重くのしかかる。

あの時、もう一度と傷つけないと誓ったのに……

これ以上顔を見ているのがいたたまれなくなってきたので、ベッドから降りようと脚を下ろす。すると椅子に座っていた遥香が急に立ち上がり、肩を押されつけてきた。そのままベッドに押し戻される。

「あー、まだ起きちゃダメだよお兄ちゃん、体、傷がいっぱいついてるんだから」

「痛た！ 痛い！ 痛いから！ わかった！ わかったってー、起きないから手をどけろー、手をーー！」

「だーめ、お兄ちゃん、私が放したら絶対起きかけやつもん

「起きなーってーー！ 約束する、起きないからーー！ だから手を放してーー！」

体にはまだ先ほどのダメージが残っている。自分で動く分にはゆ

つくり動かせば何とかならないこともないが、外部から力を掛けられると、とんでもなく体中が痛む。

さつき抱きつかれた時はそんなに力が入っていなかつたせいかなんとか我慢できただけど、これは無理だ、我慢で何とかできるレベルを軽く超えていく。……我ながら、これだけの傷を負つてよく生きていたものだと思つ。いや、違うな、これも散々手加減された結果だろう。本気で来られたら、間違いなく最初の一撃で俺は瀕死になつていた。

「わう、約束だよ？」

ようやく遙香がしぶしぶといった感じで離れてくれる。体の痛みが引いていくと同時に、なんだかものさびしい感じもした。……いやまた、俺はなにを考えているんだ？

ちよづじ遙香が再び椅子に座りなおしたところで、タイミングを合わせたかのように部屋のドアが開いて、誰かが入ってきた。鳴月龍彦ひに 龍彦、お父さんと、鳴月龍一郎ひのうづちゆういちろう、おじいちゃんだ。一人とも顔がにやけている。……この一人、ぜつたいドアの向こうにいたな。じとじとした目で一人をにらんでいると、苦笑してお父さんが口を開いた。

「こやあ、本当に龍斗は遙香に弱いな。見ていて面白い。それにしても、散々な目にあつたようだな。……父さん、龍斗にあまり無茶をさせないでください。孫をいじめるのがそんなに楽しいですか？」

「ふおつ、まさか。こんなにかわいい孫をいじめる」との、一体何が楽しいといつぶつじや？ むしろかわいそうに思つてつぶつじやわ

「…あなたがそれを言つますか。龍斗をこんな姿にしたのはあなたでしょに」

「ふおつふおつふおつ、やうだつたかのうへ。最近物忘れが激しくての、もつ覚えとりんわ」

「全くあなたつて人は本当……。もつといです。聞いた私が間違つていました」

おじこちゃんとやらなこじを話していたお父さんはハド会話を断ち切り、俺の方に向き直つた。

「龍斗も、あまり無茶はするなよ。お前が怪我するたびに神樂耶さん、ものすじく心配するんだから。……まあ、その感じだと大丈夫そうだな。まだ体中痛いだろ？が、丸一日もすれば痛みも完全に消えるんじやないかな。それまではゆっくり寝ていなれ。くれぐれも動きまわつたりしないよう」

お父さんは俺の顔を覗き込むよつて諭すよつて言つた。
いつも俺たちのことをやさしく見守つていてくれる、心配してくれる。強くて、かつこよく、俺の血縁のお父さん。

「あたりまえじや、龍斗に傷をつけなこじようにどれだけわしが苦労したか。この程度でくばつてあるよつじや、鳴刃の名折れじやわいなるように力加減を調節しているんだろう。

いつもは厳しいおじこちゃんがいつこつ細かことひどく優しいこじを俺は知つている。

抵抗するのも面倒なので、俺がおじこちゃんのするがままにされ

てこると、ふつとおじこちやんの手が離れた。見上げるとやうに部屋の空気が変わったのを感じ取つたお父さんは遙香に声をかけた。

何か大事な話があるんだ、俺はおじこちやんの顔を見返した。
部屋の空気が変わったのを感じ取つたお父さんは遙香に声をかけた。

「遙香、お父さんとあつちで遊ぼうか、何して遊びたい？」

「うわあ！　お父さんと遊ぶの久しぶりだね。なにしよう、私お父さんとやりたこと、こつぱーあるんだーー！」

そう言つて遙香はお父さんの手を引いて部屋から出て行った。
パタン　ヒドアのしまる音がして部屋は沈黙に包まれる。その沈黙を破つたのは、おじこちやん。

「わい、まずは先ほどの評価からやひつかの。まずわしの殺気に耐えきつた精神力は認めてもいこじやひ。割と本氣で放つたつもりだつたんじやが。まあ、いいといはせそれぐらこじやの。攻撃も防御もなつてないし型もできておらん、何より戦闘での心構えがないの。……まあそれは当り前か、これから学んでいけばよいことじやからね。なんにしてもわし相手にその歳ではもつたほうじや。よく頑張つたの、龍斗」

おじこちやんの言葉は続く

「お前の場合は気持ちばかりが先走つて、少々まわりが見えなくなつているよつじや。まずは自分のことを客観的に見つめることができるようになること。話はそれからじやな。……鳴刃流を学ぶにはお前はまだ幼くさむ」

「でも……」

「でもじやない。今のお主に教えることなど何一つないわ。わかつたらまでは言われたことをきちんとやる」とじやな。もしそれができたなら……、鳴円流第一十三代頭首 鳴月龍一郎、このわしが直々に教えてやるひではないか」

頭首としての風格を感じさせながら最後をそつと締めくくつたおじいちゃんはふおつふおつふおつ とわざとじりじり笑いながら部屋を出て行った。

部屋にはまた沈黙が訪れる。

教えてやる。おじいちゃんは確かにそつこつた。すぐに教えてもうえるとはもとから思つていなかつたので、その言葉が聞けただけでも上出来。その上おじいちゃんに直接教えてもらえた。強くなるにはまたとない機会、絶対にものにして見せる。

- - - 僕は強くなる。手りたいものは自分で手る。そのための、力

確固たる決意を胸に、少年は小れな一歩を踏み出す。

それは小さな、小さな一歩。それでも少年にとっては確かな一歩。

少年が力を手にするのはまだ先の話

ズン……

地面を揺らすほどの衝撃があたりを突き抜ける。衝撃波で周囲の木々がざわめき、それに驚いた鳥達がざあつと一斉に飛び上がった。再び静けさに包まれる森。

衝撃の中心にいた二つの人影は、その場ですこしの休憩を取つた後、森を抜けるために歩きだした。

「ふおつふおつふおつ、まさかこのわしが一撃入れられるとは思つてもみなかつたぞ」

快活に笑う老人 鳴月龍一郎は、隣を歩いている少年 鳴月龍斗に話しかける。

「いいえ、2時間ねばつてたつた一撃ですよ？ まだまだ精進が足りせん。……というかあの最後の一撃、全力で放つたはずなんんですけど。どうして祖父ちゃんは平氣で歩いていられるんですか。おかしいでじょう」

そう、龍一郎はつい今しがた龍斗の渾身の一撃をくらつて数メートル吹き飛んだ後、背後にあつた木にたたきつけられた。

先ほどの音はその時に生じたものだ。

あれだけの音を発する衝撃を生身で受けて、立つていられるものなどまづいない。普通の人間なら即死しているはずなのだ。

それほどの攻撃を受けたというのに、龍一郎は顔に笑みさえ浮かべて平然と龍斗の隣を歩いている。

「ふおつ、鍛え方が違うんじゃよ。あの程度でわしは倒れん。鳴月
りゅう 正統継承者の実力をなめてもらつては困るぞ」

……祖父ちゃん本当に六十歳越てるんだろ？ といつが、
もう人間かどうかさえ怪しいレベルまで到達してるよな……

龍斗は心中でひそかにそんなことをつぶやく。

「失礼な、わしはれつきとした人間じゃぞ。ちゃんと呼吸しとるし、
言葉もわかる。最近ちいとぼけ始めたくらいじゃからの」

一ヶ月前の夕飯が思い出せんのじゃ。と言つて龍一郎は不自然な
ほど満面の笑みを浮かべる。

「……人の心を読まないでください。というか一ヶ月前の夕飯覚え
ている人なんていませんよ、普通」

「そうかの？ 一年前くらいまでは思い出せてたんじやが」

「一年前つて……ほんの最近まではできてたんですけど。いつたい
何者ですかあなたは」

「なあに、古い先短いただのボケ老人じゃよ」

「古い先短い老人は朝から孫を傷めつけたりなんてできませんよ」

「何を言つ。わしは傷めつけてなどないぞ、稽古と呼べ、稽古と」

「あれのど」が稽古ですか。一步間違えれば死人が出ますよ、あれ

「心配なこど。わしは殺人者になどなつたくはないからな。やつて
もせいぜい半殺し程度じや」

「あんなものくらひて半殺しで済むはずないでしょ」が。嫌ですよ
俺、この歳で実の祖父に殺されかけるなんて」

そんなことを話しながら歩こんど、だんだんと周囲の木々が
少なくなつてこき、やがて日本造りの長屋のような外見をもつ大き
な建物が見えてきた。

それは龍斗たちが住んでこる屋敷。その玄関に誰かが立っていた。
その人物はこちらを振り返ると、小さく手を振つて龍斗たちの方
へと歩きだす。

「お祖母ちやん、おはよつ

龍斗は自分の祖母である那人、鳴円時代じねいたいと挨拶を交わす。

「おはよつ、ばあさん。今日もいい天気じやな」

「おお、おはよつ、龍斗。じこさんも。ふたりとも、朝からあこか
わらわ元氣だねえ。おばあちやんも少し見習わなこと。最近どうも
調子がよくなくてね」

「何を言つたか、ばあさん。わしらはまだまだ長生きせんとこかんが。
特にわしは龍斗を鍛えねばならんから」

「あらあら、あんまりこじめてやるごじやあつませんよ。龍斗はじ
いさんとは違つんですかね」

「なんじや、ばあさんまでわしを悪者扱こしあつて。あれはこじめ

じやなくて稽古じやとこつておるの」。こじけぬや、わし

「何もこんなことでいじけなくとも……それに祖父ちやんは毎朝
いじけてくるじやないですか」

「……いいんじや、どいつせわしの味方なんかだれもいないんじや」

毎朝行われてゐる光景。……毎朝いじける老人つてどうなんだろ
うか。

しゃがみ込んで地面にのの字を描き始めた龍一郎の姿を見て、龍
斗と時代は苦笑を浮かべる。

そんなことを玄関先でやつていると、不意に玄関の引き戸が開か
れた。

「おばあちゃん、朝日はんの準備、できたよー」

そう言いながら姿を現した少女は、朝日のに瞬だけ目を細め、
時代のそばに龍斗たちがいることに気がつくと、ぱーと顔を輝か
せてまっすぐに龍斗のもとへと駆け寄り、おもにっきり飛びついた。

「お兄ちやん！　おはよう！　ってなんかまた傷増えてない？　無
茶しなこでつていつも言つてゐるのに。お兄ちやんは氣にしなくとも、
私は心配するんだからね」

龍斗に抱きついてきた少女は、妹の遙香。

「おはよう、遙香。祖父ちやんの相手して無傷でいるのは無理だと
思つただけど、氣をつけはいるんだがこればっかりはどうしよ
うもない。でも、心配してくれてありがとうな

龍斗は抱き付いたまま「うら」を向いて頬を膨らませてこる遙香に微笑みかけ、その頭に手をおいて、髪をすくみつけてやさしくなでてやる。とたんに膨らませていた頬が緩み、幸せそうに顔をほころばせて龍斗の胸に顔をしづめる遙香。

その行動を見て龍斗は再び苦笑する。抱きつかれるのは正直悪い気分はしないが、わすがにこれはどうなんだろうか……

ふと視線を上げると、そこには優しく微笑んでこる時代と、ついさっき復活して「ニヤニヤとした笑みを顔につかべる龍一郎の姿が。

「おひおひ、お熱い事じやな、お一人さん。毎日毎日抱きつかれて、うらやましいの? いつ結婚しちゃつたらどうじゅ? わしはお似合いだと思うがの」

その言葉を聞いたとたん、顔を耳まで真っ赤に染めて動かなくなつてしまつ遙香。

龍斗は呆れ顔を龍一郎へと向ける。

「からかわないでください。遙香は俺の妹です」

「なんじゅ、龍斗はまじめでつまらんな。その点遙香は素直でかわいいの? ほれ、龍斗も自分の気持ちに正直になつたらどうじゅ?」

「

「世迷言を……、ついにボケ始めましたか

「じゃかりわらつておひたじゅわ。わしはもうボケ老人じゅ

「ああいえば」「うら」。祖父ちゃんと話してこるときりがないのですね

……祖父ちゃんと話しているのもすくなく疲れる。

投げやり気味にそう言い放ち、げんなりとしている 龍斗
孫に軽くあしらわれたー と言いながら高笑いをしている 龍一郎
抱きついたまま顔を真っ赤に染めて硬直している 遥香
そんな三人の様子をにこにこと眺めている 時代

鳴月家の朝はいつもおなじよう、いつも一日が始まる。

*

*

*

「それにしても、龍斗も随分と強くなつたものじゃな。この身に一撃を受けたのは四十年ぶりくらいこじゅや」

あの後全く動かない遙香を抱えて家中に入つた龍斗達は、（運んで）いる途中に遙香の口から「お兄ちゃんと、結婚……」はつう／＼／＼とか洩れていたが、あれは何だつたんだろう（やつと回復した遙香を交えて朝食をとつていた。

「本当にですか、僕はまだ父さんと撃ち合ひすりできないのに……」父親として息子の成長は嬉しいけど、同じ鳴月流を修める身としてはちょっと落ち込むなあ

「すず……とみそ汁をすすりながら話しているのは鳴月龍彦、龍斗の父親だ。

「でも父さん、八年も頑張つてたつた一撃だよ？　いくらなんでも時間がかかりすぎだと思つんだよね」

この言葉を謙遜で言つてゐるつもりなど龍斗には全くない。実際八年間毎日稽古をつけてもらつていたはずなのに、今朝の一撃まで一度も攻撃が通つたことはなかったのだ。

今までの努力が無駄じやなかつたと証明された。そのことを純粋に嬉しいと感じ、しかしそれで満足はしていない。龍斗の手指すものはもっと上にあるのだから。

「でも、おじいちゃん相手にまともな試合ができるのなんて龍斗ぐらいなんじゃない？　お母さんそれだけでも十分す」こと思つわよ？」

龍彦の隣に座つておかずには箸を伸ばしている女性、鳴月神樂耶はかぐや
そう龍斗に話しかける。

「やうじやで、龍斗がいないとわしさ退屈で死んでしまつわ」

「いやまあ、うれしいのは事実だけど……、祖父おじさんは絶対俺で遊んでるだけでしょ」

「そんなことはないぞ、今日わしが何度ひやつとしたことか。有効打は一撃だけじゃつたが、あと一步のものを数えればたくさんあつたぞ。あんなに楽しい稽古は久々じゃつた」

「おじいちゃん、それを遊んでるつて言つたじゃないかな……。」

食卓に笑いがまきおこる。仲睦まじい家族、近所ではそつ蹲され
れているし、実際自分でもそう思つ。

ただ家族で朝食を食べているだけなのに、それがとても幸せな時
間に感じる。

「あ、ほり、もひるんな時間。やるやく支度しなさい」

神楽耶の一言を聞いて龍斗が時計に手をやると、時計は7時20分を指していた。確かにそろそろ出たほうがいいだろ？

龍斗と遙香は、近所にある私立帝学園みかどがくえんの高等部に通つてゐる。

今年で創立50周年を迎えるという歴史を持つ小中高一貫校で、全校生徒は2000人を超えて、これまでに多くの優秀な人材を輩出していることで有名な学園だ。

二人とも初等部からここに入学しているが、中等部と高等部には受験入学制度も設けられていて、毎年優秀な人材が入学しているらしい。

学校に行くには少し早い時間と思うかもしだれないが、それには地理的な要因が関係している。

学校自体は鳴月家の敷地を出て徒歩10分ほどの位置にあるのだが、問題はその鳴月家の敷地面積だった。鳴月の敷地は常識外れに広い。龍斗たちが住んでいるこの屋敷から、正門までたどりつくのに20分ほど歩く必要があるのだ。

……いつたいどれだけの資金があればこんなに大規模な土地が買えるのかなど考えたくもない。しかもそれを現在まで維持し続けるだけの財力を持つているというのが龍斗には恐ろしかった。

以前時代が通帳の整理しているのを横で見ていたことがあったのだが、ゼロが並びすぎていて数えきれなかつた。銀行が破産したらどうなるのか、と恐る恐る質問してみると、あの程度なくなつても問題ない、と笑顔で返されてしまった。それ以来龍斗は怖くてうちの通帳を見たことはない。

整然と並ぶゼロの恐怖を思い出しても身ぶるいを覚え、一刻も早く忘れるべく急いで支度を始める龍斗。

制服に着替え、教科書の入った鞄を持って玄関に向かう龍斗に、後ろから遙香が追いついてくる。

「まつて お兄ちゃん、はいこれ お弁当。中身は開けてのお楽し
み！」

そう言つてきれいに包まれたお弁当を差し出す遥香。

「ああ、ありがとう。でも、さすがに毎日やるのは大変じゃないか？」

高等部に進学するにあたつて自分で弁当を作りたいと言つだした。遥香は、母親の神楽耶に教えてもらいながら料理の勉強をしていた。龍斗もある程度料理はできるので神楽耶が忙しい時に何度か教えたことがある。始めたばかりのころは危なっかしくて見ている「いつちがひやひやさせられたものだが、もともと何でもそつなくこなすタイプの人間だつた遥香は見る見る上達していった。

ある朝、「おいしくないかもしれないけど……」と不安そうにお弁当を渡された時はさすがに驚いた龍斗だったが……妹が一生懸命作つたもの、とありがたく受け取つた。

学校で友人に冷やかされながら食べてみたのだが……なんでも不安そうにしていたのか不思議に思つほどおいしかつた。その日家に帰ると、遥香が玄関の外で待つていたのにも驚いたが。

よっぽど感想が聞きたかったのだろう、不安そうにしている遥香においしかつた、と伝えると「じゃあ、明日から私がお兄ちゃんのお弁当作つてあげる！」と言われた。

こんなことがあったのが今年の春。それ以来、龍斗の弁当は遥香の担当になつっていた。

「ほひ、お兄ちゃん、早くしないと学校遅れちゃうよ。」

「ああ、今行く」

先に靴をはき終えた遥香は玄関の端に立つて兄を待つている。龍斗も靴をはき、一人で玄関を出る。

「「いつてきます」」

意図せずして一人の声が重なり、顔を見合させて兄妹はくすり、と笑いあう。

家の周りを囲む森へと元気よく駆け出していく遙香

それを追いかけることはなく、しかし見失わない距離を保つて歩く龍斗

歩調は違えども 決して離れることをしない一人の姿は、やがて朝の暖かな木漏れ日があふれる森の中へと消えていった……

「ねえ、お兄ちゃん、いつも思つてたんだけど、なんで私たちの家つて学校の反対側に建つてるのかな？あの家建てたのつておにいちゃんが生まれたときなんでしょう？だったら正門も学校のほうにあるんだし、なんでわざわざあんなに遠くに建てたのかな？」

家を出て15分ほどたつたころ、正門まではまだ少し歩かなくてはいけない一人は、今は肩を並べて歩いていた。

「俺も詳しく述べ知らないんだけどね。父さんが言つことは、あそこに建てるつて言いだしたのはどうも祖父ちゃんらしい。一応みんな反対したらしくんだけ……。遙香も祖父ちゃんの性格は知ってるだろ？」

「あー……うん。一度言つ出したら何言つても絶対に止まつてくれないよね」

龍斗も遙香もそのことは十分すぎるほどに知つていた。祖父ちゃんのやることは全く理解に苦しみ、と龍斗は苦笑いを浮かべる。

「あらかた俺への嫌がらせつて感じだろ。それ以外にわざわざこんな奥地に立てる理由なんかない」

「さすがにそれはないと思つたけど……絶対ないつて言い切れないところがおじいちゃんなんだよね」

「まあな、祖父ちゃんは自由すぎるんだよ。あれだけ本能に忠実に生きてる人間はそういうない

「私もどきどきした思ひ。でも面白いよね。次は何をするのかな
つしてちよつといじめじめするもん」

「俺を巻き込みさせしなければな。見ている分には面白いだろうが、一緒に連れまわされる俺の気持ちも少しは考えてほしいよ。何の準備もなしに富士登山とか言い出したときはさすがに死ぬかと思った」

「お兄ちゃんあの時本当に死にそうな顔して帰ってきたもんね。おじいちゃんはすっ」元気だつたけど……他にもいろいろあったよね。テレビに出たいとか、エベレストに登りたいとか、世界一周旅行に行こうとか、自分の会社がほしいとか。

「世界一周はさすがに断つたけどな。あとは国會議員になりたいとか言つてた時期もあつたつけ」

「やうそ、あれはほんとにびっくりしたよね。友達に街頭演説していることか見られて恥ずかしかったよ。でも当選しちゃつたのはすごこと思つよ。おじいちゃん意外と人望あつたんだね。」

「いや、人望とかの問題じゃないと想うんだが。しかし、確かに全くの無名なのによく当選できたよな。本人はテレビに出る夢も叶つて一石二鳥じゃ とか呑気に喜んでたつけ。まあ、結局飽きてその次の選挙は立候補しなかったけど。」

「すいよおじいちゃん。何でもできる私の自慢のおじいちゃんなんだよ。」

「何でもできるから余計に困るんだよ。言うだけならかまわないんだが、それを実行しようとするからあの人たちはたちが悪い」

うれしそうにそんなことを語り遙香に 龍斗はげんなりと肩を落とす。

実際龍斗も祖父ちゃんのすじこところは一度言つたことはどんなことであろうと実現させてしまふ所だといつてい。

見事に議員に当選したし、そのときにテレビ出演も果たしていた。世界一周も一人で旅立つていつたし、ついでにエベレストも登つてきたらしい。

エベレストについてで登つた人なんか祖父ちゃんくらいではないだろうか。

気まぐれで設立した会社も、今は父さんが経営を担当していて、現在では『鳴月グループ』と言えば業界内では知らない人がいないほどまでに成長している。その経済規模は一説には小国の国家予算並みとも言われていて、鳴月グループの援助が得られれば、絶対に赤字にならないという噂が広がっているくらいなのだ。

しかもその噂はどうやら事実のようで、実際鳴月グループにかかる会社には赤字が一切ないと父さんが祖父ちゃんに報告しているのを耳にしたことがある。

鳴月家の万能さにはもう驚きを通り越して呆れるよ、と龍斗はため息を漏らす。

そんなことを話しながら歩いていふうちに、二人は木々の隙間から正門が見えるあたりまで来ていた。徐々に姿を現した正門の両脇に一人の警備員が立っているのも見える。

高さ三メートルほどの鉄製の扉がそびえ立つてゐる正門の様子は、見る者に中世の古城を連想させる造りになつてゐる。これを見てまさかその先に日本風の屋敷が建つてゐるとは誰も思わないだろう。この正門も龍一郎が発注したもので、西洋風にした理由は、その

ほうがかっこいいから だつたと龍斗は記憶している。

正門から少し離れたところには、一階建てのコテージのような建物が建っている。この建物の一階は警備員たちの休憩所になつて、二階では電子制御で門の開閉を行えるようになつていた。

実のところ鳴月家には龍一郎という絶対無敵のセキュリティが存在するので、特に警備員など必要はない。しかし龍一郎はこういった仕事をたくさん用意して多くの人員を雇っていた。

警備係、掃除係、食事係、森の手入れ係などその種類は多岐にわかつて細かく分断されており、買い物係というただ買い物をしてくるだけの係なども存在している。

その使用者たちのための宿舎も敷地内に設けられてはいるのだが、住み込みを強制しているわけではなく、単に家が遠い人のための処置だ。

しかしこの宿舎がなかなか住みやすいということで、ほとんどの使用者がこの宿舎を利用していた。そのため鳴月家の敷地内には常時数百人ほどの人が住んでいる状態となつている。

この就職難に対抗するんじゃー！！ という龍一郎の鶴の一声のもと十年ほど前から開始されたこの雇用体制はなかなか高評価を得ていて、鳴月家で働くこと自体が一種のステータスとして捉えられるまでになつっていた。

これだけ盛大に金を使っているにもかかわらず、減るどころか逆に貯蓄が増えていつているという事実があるあたりに、鳴月家の経済力の異常さがうかがえる。

龍斗たちが正門に近づいていくと、警備員の一人 髪を赤く染めた男が龍斗たちに気がつき大きく手を振つていた。もう一人の警備員 青髪の青年も振り向いて軽くお辞儀をする。

遙香もそれに元気よく手を振り返す。

「おう、おはよつ遙香ちゃん、龍斗さんも。くうう、いつ見ても絵になる一人だねえ」

「おはよつございます、龍斗様、遙香様。少々お待ちください。今正門を開けますので」

龍斗たちをからかう赤毛の男を咎めるように横目でちらりと見て、しかしそくに視線を戻した青髪の少年は無線機を取り出して開門の指示を出す。

赤毛の男、警備服をだらしなく着崩してケラケラと笑っているのは 永瀬

青髪の青年、きつちりと警備服を着こなして落ち着いた雰囲気を放っているのが 牧野

この一人は三年前にほぼ同時期に鳴月家に雇われて、それ以来現在までずっと二人組で朝方の正門警備を担当していた。

それがちょうど登校時間と重なっていたので、龍斗たちはよく二人に話しかけたりしていた。はじめは使用人と雇い主の孫 ということもあり、会話もどこかぎこちないものだったのだが、それも毎日続けばさすがに慣れるというもので、いつしか永瀬と牧野は使用人の中でも龍斗や遙香に一番親しい人間になっていた。

「おはよう、永瀬さん。毎日朝から大変だよね」

「おはよう、永瀬。……なあ、公私混同を許さないお前の性格は俺もよくわかっているつもりだ。だから呼び捨てにしたりとまでは言わないが、いくらなんでも様付けはないだろう」「うう」

牧野は非常にまじめな性格で、きっちり仕事とプライベートとを分けて龍斗たちに接していた。プライベートでは気軽に名前で呼び合っている仲なのだが、職務中に会つた時だけは、決まって龍斗たちを様付けで呼んでいた。

「いえ、こればっかりは変えることはできません。お一人は龍一郎様のご子息、ご令嬢でいらっしゃるのですから」「うう」

きつぱりと言い切る牧野に、龍斗と遥香は困ったように顔を見合わせる。

「いや、確かにやうかもしれないが……ここまで徹底されるとちよつと対応に困るんだよな」「うう」

「そうだよ、牧野さん。いつも言ひてるけど、呼び捨てでいいんだよ？ 私、様付けは他人行儀でちよつと寂しいな」

龍斗の言葉に相槌を打つた遥香の顔からふつと笑顔が消え、捨てられた子犬のような表情に変わる。明るい性格の遥香に似合わない表情。その表情は人に少なからぬ罪悪感を感じさせるもので、両親たちが遥香を必要以上に甘やかしてしまったにもこの表情が関係

していたりする。

家族でさえそんな状態になるのだ、当然牧野が抵抗に成功したことなど一度もない。

「うつ…… い、いえですが遙香を『また様つて言おうとした』…… はあ、わかりました」

様付けで呼ぼうとした牧野の言葉を途中で遮り、悲しみの表情をさらに深くする遙香。この表情が演技でなく素ができるところが遙香のすごいところだと思う、と龍斗は心の中で苦笑いを浮かべる。この表情には龍斗自身もいまだ打ち勝つことがない。

「様付けはやめます。ですが、敬語は外せませんよ。仕事中ですで、これだけは勘弁してください、遙香さん……」それでいいですか？」

「むう…… うん、やっぱり敬語は仕方ないよね。じゃあ、まずは一步前進つてことで！」

様付けで呼ばれなくなつたというただそれだけのことで、遙香の顔からさつきまでの表情が嘘のように消え去り、ヒマワリのような笑顔にとつて代わる。

さつきまで冷や汗を垂らしていた牧野の顔にも笑みがこぼれる。そんな一人の光景に静かに目を細めた龍斗は、ふと何かを忘れているような気がた。

……誰か忘れている気がする。一体何を忘れているんだろう、と周囲を見回してみると、三人から離れたところにうずくまっている人影が一つ。心なしかそのあたりだけ空気が重たく感じる。

「……あー、永瀬？ そんなところで何やつてるんだ？」

「何やつてるんだ？ ジヤない！ なんで俺にはだれもかまってくれないんだ！.. まさか遥香ちゃんここまで無視されるとは思つてもみなかつたよちくしょうーー！」

「あー、いや、その…… 浄まん。いのをすつかり忘れていた」「えつと、」めんね永瀬さん。ちよつと忙しかつたつてこいつか、そ の、ね？」

「大丈夫だ、永瀬。私はお前のことをちやんと見ていたぞ。あえて無視していただけだ」

類をひきつらせながら謝罪の口調を述べた龍斗と遥香に反して、牧野は何でもないことのようにそのままつい放つた。その言葉が永瀬をさらりと落ち込ませる。

「牧野は確信犯かよ！ 僕の扱いはなんでいつしもこいつなんだ！ 牧野ばっかり遙香ちゃんといい雰囲気になりやがつてよーー.. うらやましい！ ああうりやましいーー.. うりやましいーー.. その幸せを俺にもよこじやがれーー！」

途中から意味のわからないうことを叫びながら突然ばね仕掛けのように勢いよく立ちあがつた永瀬は、牧野につかみかかつて前後に搖さぶりはじめめる。

「わ、ちょ、また、待てって永瀬！ 苦しい、ゆりかないで、やらすなつて、うあ……」

がくがくと揺さぶられている牧野の顔からだんだんと血の気が引

していく。牧野も永瀬の腕をつかんで抑えようとしているのだが、永瀬の動きは全く止まるそぶりを見せない。むしろだんだん力が増していくように見える。

「わ、わわ、永瀬さん、ストップ！…　だめだよ！　牧野さん首ががくがくなつてる…！」

「お、おい、永瀬！　落ち着けって！　顔色悪くなつてるから…！
牧野を殺す気か！」

龍斗はあわてて永瀬を取り押さえる。掴まれていた牧野の襟から腕が離されて、地面に片膝をついてせき込む牧野。
遥香はそのままに駆け寄つてこき、背中をさすりながら心配そうに顔を覗き込む。

「牧野さん大丈夫？　顔色悪いよ？　ちょっと休む？」

「けほつ、けほつ…　まだけよつと揺れてるかも…」

「ああっ、てめ、このやうう…　この期に及んでまだ遥香ちゃんところちやつく氣か…！　離せ龍斗…！　そして牧野は俺とかわれ！」

「あ、おい！　いい加減暴れんなつて。なんでそんなに元気なんだよお前」

「俺は遥香ちゃんのためなら三年は暴れ続けるぜ…！」

「意味がわからん。ほんと朝からテンション高いな、興奮しそぎだぞ。永瀬、ちょっと頭冷やせ」

龍斗はいつまでも抵抗をやめない永瀬の首筋にトン、と手刀を入れる。すると急に永瀬の動きが止まり、ぐつたりと龍斗にもたれかかるよつに全身の力を抜いて氣を失った。

ふう、と一息ついて遙香たちのほうへ目をやると、さすがに回復した牧野が心配そうにしている遙香に、もう大丈夫です、と微笑んでいるところだった。

「心配してくれてありがとうございます。ですが遙香さん、そろそろ学校に行つたほうがよろしいのでは？　いつもの時間を過ぎてしましましたけど」

「えっ？　あ、本当だ！　お兄ちゃん！　早くしないと遅刻しちゃうよー！　牧野さん、永瀬さん、行つてきます！」

そう行つてぱつと立ちあがつた遙香は、開かれた正門に向かつて走り出す。

「あ、遙香、待つって……牧野、こいつどうじよつか」

遙香のあとを追いかげようとして、氣を失つてこる永瀬をまだ抱えたままだったことを思つ出した龍斗。顔を向けると、牧野がにっこりと微笑んでいた。

「ああ、その辺に捨てておいていいですよ。あとで私が回収しておきますから」

「え？　こいつてらしゃこませ　龍斗様」

「ええ、こいつてらしゃこませ　龍斗様」

「だから様はやめり、様は」

明かりかにわざりと言つてこいる牧野と苦笑しながら挨拶をかわした龍斗は、遙香を追つて走り出す。その後ろ姿を表情の消えた顔で見つめる牧野。

「ああ、せうでした。…………龍斗

龍斗が門をぐぐりとしたといひで不意に牧野が龍斗を名前で（・・・）呼び止める。

「……どうした

いきなり呼び捨てで呼ばれたことから驚きながらも立ち止まつて振り返ると、牧野が先ほどの場所で柔軟な笑みを浮かべて立っていた。

「いえ、最近どいつも遙香様の周囲が騒がしいようでした……お気を付けください、とだけ」

「……そつか、わかつた。ありがと」

そう短く答えて龍斗は踵を返して走り出す。その背中を静かに見つめる牧野。

「……本当に、お一人ともお気を付けて下さい。」

わざやへべりてぶやかれた牧野のやの言葉を聞くもの、そこにはだれもいなかった。

5・1・鳴月龍神一刀流

鳴月龍神一刀流、通称『鳴月流』とよばれる刀を使った戦闘技術が鳴月家には伝えられている。その歴史は古いもので五百年以上も前のものまであり、かつて戦乱の時代においては近接戦闘で鳴月流継承者の右に出るものはいないとまで言わしめたとされている。その所以が、継承者達の有するおよそ人間とは思えないほどの身体能力であった。

彼らは一蹴りで幅五メートルもの溝を飛び越えることができる。彼らは一瞬のうちに十メートル以上の距離をゼロにすることができる。

彼らの放った拳は頑丈に塗り固められた城壁を一撃で粉砕することができる。

人間であることを疑うほどの力をもつて瞬く間に城を突き崩し敵兵を無力化していく彼らの姿は共に闘う味方でさえも恐怖を抱かずにはいられなかつたという。しかしそれは無理のないことだつたといふべきなのだろう。

彼ら鳴月流継承者が人間以外の力行使しているというのは紛れもない事実なのだから。

- 鳴月龍神一刀流秘術・開眼

かつてその絶大な力をもつて神々を統べる頂点に君臨したとされる最強の龍神『龍王』という存在がいた。

開眼はその龍王の力を術者が取り込むことによって、驚異的な身體能力の向上を可能とする秘術である。

継承者はこの取り込んだ力を制御、収束、循環、発散させることによって人知を超えた運動能力をその身にやどす。

鳴月の姓を持つ人間にしか扱うことのできないこの鳴月流唯一にして最大の秘術は五百年以上たつた今でも脈々と受け継がれている。

その鳴月龍神一刀流第二十五代継承者、鳴月龍斗は現在先を走る妹の遙香の背中を追いかけていた。

「遙香、ちょっと待てって。あんまり急ぐと危ないぞ」

「だつて、遅刻だよ！ 私もうあんな罰は絶対に受けないんだから！！あの時はお兄ちゃんにまで迷惑かけちゃったし…… 絶対に遅刻するわけにはいかないんだよ……」

後ろを振り返る余裕もないのか遙香は速度を緩めずにそう叫ぶ。確かに帝学園はとにかく時間に厳格だった。たとえ一秒でも遅刻は遅刻 というコンセプトのもと、遅刻者はその場で生徒指導室へと連行されて必要書類に記入させられたのち罰則を宣告される。反省文などはまだ楽なほうで、運が悪いときには校内のゴミ拾い、中庭の雑草抜き などのもう地獄としか表現のしようがない罰則まで存在している。

さすがに小中高一貫校ということだけあって、帝学園の敷地面積は鳴月家のそれ以上の広さをほこる。「ごみ拾いなどはその全域を対象とするというのだから、一ヶ月程度では到底終わらない量となる。遅刻しただけでここまでやらされるのは世界中を探してもここ帝学園ぐらいだわ！」

遙香は以前、一度だけ遅刻したことがあった。といつのも田ざまし時計を三十分だけ遅らせるという仕様もなくとものすごく迷惑な

いたずらをしかけた龍一郎のせいだつたのだが、そんな言い訳を聞いてくれるほど帝学園の生徒指導部は甘くない。

当然の「ごとく遅刻したものには罰が与えられ、」のときの遥香は全く運の悪いことに校内「ごみ拾いが言い渡された。

目に涙を浮かべ、希望を失つた顔で助けを求めるようにこちらを振り返つたあのときの遥香の顔を龍斗は今でも覚えている。罰則を言い渡した教師でさえも罪悪感を覚えずにはいられなかつたようだ、頬をひきつらせながら「まあ、がんばれ」といつた声は心なしかうわづつていた。

かわいそつだと思つならはじめからあんな罰則を与えないでほしい。

結局龍斗が手伝いの許可をもらい一人でとりかかつたおかげで、二ヶ月弱で全校を回りきることができた。

二ヶ月間ゴミを拾いつづけるというのももちろんつらいのだが、それよりもすれ違いざまにおくられる生徒たちからの同情の視線に大きな精神的ダメージを与えた。この「ゴミ拾いには顔を覚えられるとともに『はずれくじを引いたかわいそつな遅刻者』として校内の有名になる』という嬉しくも何ともないおまけがついてくるのだ。

遥香にとってその出来事はちょっととしたトラウマになつてゐるようで、それ以来遅刻したことはない。無論龍斗にとつてもいい思い出とは言えないのだが。

「別に迷惑だとは思つていないが……確かにあればひょつとつらいよな、何度もやりたいものじゃない」

「でしょ、だつたら急がなくちゃ！ まだぎりぎり間に合つかもし

れないし」

時間を気にしつつ学園へと急ぐ一人。その数メートル後ろに、二人の背中を静かに見つめている男の姿があった。男は金色に輝く（・・・・）両目をすつ、と細めると、音もなく一瞬で龍斗の背後へと移動する。そのまま右拳を振りかぶり少年の後頭部にしつかりと狙いを定めて……

ヒュンツ

勢いよく振り下ろされたときには既に少年の姿はそこになく、拳は空を切る。しかし男の顔に動搖はない。それはあらかじめ予想していたことであり、第一今回の目的は少年のほうではない。ニヤリと口元がつりあげて笑う。

すぐさま本来のターゲット、少女のほうへと意識を切り替え、再び右腕が振りあげられる。前を走る遙香では後ろで起こっていることに気づけない。それにたとえ気づいたとしても避けるすべを持つていなき彼女では、普通ならばこの一撃で確実に意識を刈り取られるはずであった。

そう、普通ならば（・・・・・）

「ゴッ」という打撃音とともに後頭部に衝撃が走り、バランスを崩した体がアスファルトへたたきつけられる。

自分の身に何が起こったのかが認識できない。

倒れている、自分が？ まさか、そんなはずは……

「つぶせに倒れたままわずかに頭を動かして周囲を確認すると、二対の靴が目に留まった。そのまま視線を上に上げて一人の顔へと

目線を上げていく。

そこに立っていたのは男同様金色（・・・）瞳を輝かせている龍斗、そしてその背中に守られるようにして遥香が立っていた。彼女は何が起きたのか分からぬといふ感じの表情で、疑問と戸惑いの表情を浮かべたまま硬直している。

5・2・鳴月龍神一刀流

「ふむ、みじとじや。せか返り討ひにやれるとは思つてもみなかつたの」

何事もなかつたかのように襲撃者、龍一郎は平然と起き上がる。その動作にダメージを負つておるような様子は全くなく、むしろ笑みを浮かべる余裕さえ持つていた。

「ふおつふおつふおつ、今日は本当に楽しい日じゃな。せか一撃田をじんなにあつたり入れられるとは。全く予想外じやつた」

体についたわずかな泥をはらいながら愉快そうに笑う龍一郎に龍斗はいかにも迷惑そうにして顔をしかめる。

「何が楽しい日、ですか。いきなり襲つてこなでくださつよ。しかも『開眼』まで使つていいし、全くいたずらじめじがありますよ」

？

「まあまあ、よいではないか。結局は無事お前が守つてしまつたんだ。それにその大切な妹を守る」ことがお前の目的だったはずじゃが

？」

「それはそうですが、だからと言つてわざわざ襲つてくる必要がないにあるのかと言つておるんです。ましてや開眼まで使う必要がないにあるつてことなんですか。遥香が怪我でもしたらどうあるつりますか」

「セイは心配しておらそよ。遙香のことはお前がしっかり守つてくれ

れると言じておるから」

「まあかそんな信頼の言葉を襲つてきた人間の口から聞く日が来るとは想つてもみませんでした」

「やうじやな、壱つたわし自身もびっくりして」といひじゃ

「……遊んでますよね、絶対俺で遊んでますよね。もうここ加減やめてくださいよ。いい年していたずら好きとか恥ずかしく思わないんですか」

「なにが恥ずかしいものか。樂じることをして何が悪い？ わしはあと一百年はお前たちのことをじり倒すつもりじゃからの」

「一百年で、死んだ後もいじられ続けられるんですか、俺

龍斗は深くため息をつき、呆れたようじがつと肩を落とす。同時に金色だつた瞳が普段の黒に戻つていぐ。それを満足そうに見ていた龍一郎の瞳からもすつ、と金色の輝きが失われていく。

「うむ、開眼の制御はよく出来てある。ずっと安定してあるよつじや」

腕を組みながりつとうふ、ひとり満足そうにうなづいている龍一郎に龍斗は曖昧な笑みを浮かべる。

「まあ、確かに自分でも上達したとは思いますけどね。それでもまだ祖父ちゃんのようにはいかないですよ。それにアキアの制御に関しては父さんのほうが俺より数段上ですしお」

「無理もない。あいつは制御だけを見ればわしに匹敵するものを持つておるからな。じゃが、総合的に見ればやはりお前のほうがずっと上じやよ。普通はお前ほどの域に達するまでに最低でも一十年はかかるんじやぞ。それをたつた八年でたゞりついたお前は十分すごいと思うがの。なにしろ五百年を超える鳴月流の歴史の中でも前例がないことなんじやぞ。このわしでさえ十年はかかったんじや。そういう面で言えばお前はすでにわしを超えとるんじやよ」

「ほめられて悪い気はしませんが、まだまだ『龍眼』（りゅうがん）には遠く及ばないんですね」

「それこそ当たり前のことじやよ。龍眼は開眼の完成形にして鳴月流の目指す最終目標じや。過去五百年間で龍眼成功者は始祖・玄十郎様とわしのたつた二人しかおらんのじやぞ。そのわしでさえも四十年かけてやつと辿り着いた極致。まだ十六やそこらの若輩者がそう簡単に会得できる代物ではない」

「鳴月流の最終目標、ですか。はたして俺にたゞりつけるかどうか」

「やうじやの、長く険しい道のりになるじやう。修練の過酷さも開眼の比ではない。比べるのが馬鹿らしくなるくらいに。並の人間ではおそらく精神が持たんじやう。まあせいぜい頑張ることじやな。なに心配はいらんよ。お前は三人目になつてる資質を持つておる。努力次第ではいずれたどりつくこともできようぞ。そんなことよりも龍斗よ、学校へは行かなくていいのか？ あと五分で遅刻確定じやが」

真剣な表情から一転、意地の悪そうな笑みを浮かべる龍一郎の発した遅刻といつ言葉にはつ、とよつやく我に返った遙香がとたんにあわて始める。

「やつだ！ お兄ちゃん遅刻……」「うう、もう絶対間に合わないよ……」

田代につけたぽいの涙を浮かべて遥香はその場に崩れ落ちてしまつ。

「……、龍斗。 遥香を泣かせたらダメじゃね。 かわいい孫娘を泣かせる輩はわしが成敗してくれよう」

「……なんで俺が責められるんですか。 遅刻しそうなのは祖父ちゃんが襲ってきたせいでしょうが」

「はい、何のことかの？ わしに言われても困ります」

「……もつこいです。 覚悟しておいてください。 帰ったら全力で三撃田をたたきこんでやります。 遥香、行こう。 急げばまだ間に合うかもしれません」

「だ、だって、もう五分切つてるんだよ。 ごめん、お兄ちゃん、また」「拾こ、ああ、あの懸夢が……」

もはやまともに紅葉を発するひともできないうらこに落ち込んでしまつた遙香に、龍斗は苦笑しながら近づく。 そのまましゃがみ込んでいる遙香の背中とひざ裏に腕をまわすと、そのまままつ、と軽やかに持ち上げる。

俗に言つお姫様だこのかたちで。

「ふえ？ え、ちょ、ちょっとお兄ちゃん！？」

あまりにも唐突すぎる兄の行動に驚きとそれ以上の羞恥で激しく

動搖し顔を真っ赤に染める遙香に、龍斗はにつゝりと微笑むと、その目に金色の光が宿る。

膨大な量のエネルギーが体内で循環を始めたことで、その余波を受けた周囲の空気が蜃気楼のように揺らぎを生じさせる。

「それじゃ、祖父ちやん。行つてきます」

「もう、氣をつかない」

ひらひらと手を振つてゐる龍一郎に背を向けた龍斗は学園のある方角へと向き直る。

「さて、遙香、じつにまつてゐる。おまけに揺れるかも知れないから」「ひら

戸惑う遙香を抱えたまま力強く地面を蹴つた龍斗の体が数メートル上空に舞い上がる。そのまま近くにあつた家の屋根の上に着地すると、再び跳躍を繰り返して次々と屋根の上を飛び移り、あつとう間にその姿は小さくなつっていく。

「さて、では来るべきとのためにウォー＝ハグアップでもしてお
くかのー」

やがてその姿が見えなくなるまで見送つた後、愉快そうに笑う龍一郎の姿も静かにその場から消えていった。

6・1・帝 兼継（前書き）

今回は若干文字数が少なめです。

といつのもちよづじよく切れるタイミングがなかなか見つけられないですね（笑

自分の書いた作品の話の切れ目がわからない私つて一体……

腕の中の遥香にできるだけ衝撃が伝わらないよう細心の注意を払いながら龍斗は学園へと走っていた。いや、走っていた というのは適切ではないかもしない。

正確には立ち並ぶ家の屋根から屋根へと高速で飛び移つて移動している。

開眼による身体能力の強化を受けている龍斗は生身で時速五十キロオーバーという自動車並みの移動速度を可能とする。

それだけの速度を出せば体に受ける風圧も相当のものになるはずなのだが、彼の周囲にはせいぜいそよ風程度の風しか吹いている様子はない。この不可思議な現象も開眼によるもので、一度体内に取り込んだ龍王のエネルギーを周囲に放出することによって吹きつける風を相殺しているのだ。

同時に空気抵抗も大幅に軽減することができ、さらなる高速移動が可能になるという追加効果もある。

しかしいくら軽減しているとはいっても完全にゼロにする事はできないし相応の負荷もかかる。遥香のような普通の人間ではこの風圧軽減効果がなくなつた瞬間体が潰れてしまう可能性もゼロではないのだ。万が一にも制御を手放すようなことがあってはならない。細心の注意を払いながら龍斗は腕の中で小さくなっている遥香を見て、気づく。

「遙香、何か顔が赤いようだが大丈夫か？ 熱があるとか」

「え、だ、だいじょうぶだよ。べ、別に体調が悪いとかじゃないか
ら」

「そうか？一応風圧は防いでいるけど、むしと速度緩めたほうがいいかな」

「う、うひ。ほんとにだいじょうぶだよ。全然平気だから」

「わうか、ならいいんだが。何かあつたら遠慮なく言つんだぞ」

「う、うん、ありがと」

少ししどりになつてしまつたがなんとか会話が続けられたことに遙香は安堵し、龍斗に気づかれないようにほつと息を吐く。こきなりお姫様だつにされたと思ったら次の瞬間には空を舞つていた。

普通は後者のほつが大いに問題とするべき出来事なのだろうが、遙香にとつては前者のほつが断然重要視するべき問題だった。

龍斗は妹の遙香から見ても美少年と称するべき容姿を持っていた。さらさらの黒髪に整つた顔立ち、すらっと伸びた手足はしなやかな筋肉に覆われていて、体の線は細いがか弱さは全く感じさせない。その上龍一郎の無茶苦茶な教育によつて成績は学年でも一、二を争うほど優秀で、人当たりのいい性格もあつてか学園ではアイドル的な扱いを受けることも少なくなかつた。

そんな性格も容姿も完璧な人物の顔がすぐそこにあつて、しかも自分に柔らかな笑みを向けてくるのだ。いくら妹だからといつても動搖してしまうのは無理もなかつた。

「よし、このままいけば……遙香、ちょっと揺れるぞ」

そんな遙香の心情を知らない龍斗は軽く力をためて今までより大

わく跳躍すると、呪をばねにして衝撃を緩和しながら学園の門の前へと静かに着地する。

その間腕の中の遥香には揺れるビリビリかいて衝撃が伝わっていない。

「うふ、何とか間に合つたな。いつもよじょと遅いぐらいかな？」

「う、うん。それはよかったです……その、えっとね。や、そろそろおひして貰ると、うれしいかなあつて」

「あ、ごめん。こきなり抱き抱えたりして嫌だつたよな。今おひすから」

龍斗はまつぶつと遥香を地面に立たせると急な運動によつて少し乱れた制服を整える。

「え、あ、違うよー。別に嫌とかそんなんじゃないなくて、むしろその、う、うれしかつたつていうか……つて違うー。そつでもなくて、ええと、あの、あううう」

「あー……まあ、とりあえず行こうと遙香。その話は落ち着いてからでも聞かせて貰ればいいから」

あたふたと歯切れの悪い返答を返す遙香の様子になんとなく今朝の出来事を思い出して、とりあえず教室に向かつことを提案してみる。ですがにっこりと硬直されたら困つてしまつ。

「ん、そうだね。早く教室に行こう」

ゆつくつと歩き出した龍斗のあとを遥香がとてとてとつていて。
龍斗は一年、遙香は一年なので学年は違うのだが田舎地は同じ高
等部校舎なので一人で並んで歩く。

6・1・帝 兼継（後書き）

サブタイトルの人物が全く出てきませんでした。

次回もまだ出てこない予定です。

……こんないい加減にサブタイトル決めていいんでしょうか？

「あれ、鳴月じゃないか。珍しいな、いつもはもつと早く来てなかつたつけ」

不意に背後から声が聞こえて今日は後ろからよく声がかけられるな、と思いながらも振り返るとグレーのスーツを着た三十前後くらいの男がこちらに向かつて歩いてきていた。

その顔に見覚えがないのでおれひく鳴月とは遙香のことなんだろう、と龍斗は結論付ける。

「あ、おはよひるやこます真辺先生」まなべ

真辺、と呼ばれた男はさわやかな笑みを遙香に向けていた。遙香は真辺に軽くお辞儀をして挨拶をする。

「ああ、おはよひ。で、どうしたんだ？ 寝坊でもしたのか。といつてもまだ遅刻するつてほど遅くもないけど」

「いえ、それがちょっと今田まいろこうとあつまして……」

「はは、そうか。なんだかよくわからなけりど大変だつたみたいだね。まあ間に合つてよかつたじやないか」

曖昧な表情で言葉をこじした遙香に真辺は不思議そうな表情を浮かべるが、それ以上追求することはなくそこでその話を打ち切ると、遙香の隣に立つていた龍斗のほうへと顔を向けた。

「君はじめてまして、だね。もしかして鳴月の彼氏さんとか？」

「う、違こまわよー。そんなんじゃなくて、わ、私の兄です」

「高等部一年、鳴月龍斗です」

ついたえる遙香の言葉を受けて、龍斗は軽く一礼する。

「ああ、君が。僕は妹さんのクラスの担任をやつているんだ。名前は、さつき鳴月が呼んでいたね。真辺という。よろしく鳴月。おつと、そういうえばどっちも鳴月だったか。同じ呼び方じゃ紛らわしいよね。君のことは何と呼べばいいかな」

「では名前の方でお願いします。他の先生方も皆そう呼んでいますので」

「やうか、じゃあ龍斗君。いやあ、それにしても会えてうれしいよ。君のことは鳴月からよく聞いている。なんでも強くてカッコいい血漫のお兄さんだとか」

「やめてくださいよ。俺は別にそんなに大層な人間じゃないんですから。……とにかく、先生はどうしてこちらに? 確か毎週月曜は八時から職員会議が入っていたはずですが」

「そんなことよく覚えているね、でも残念、今日は九時からなんだよね」

「え? でも九時って授業はじまつてますよね。なのに職員会議やるんですか?」

「ああ、ちよっとこころあつてね。急に本部の経営陣が来る」と

になつたらしいんだ。あまりに急な話だつたからその打ち合わせをやらなきやいけないんだよ」

「経営陣、ところと運営本部の人たちのことですか？」

「いや、今日はそのさらに上が来るらしい。なんでも帝グループ経営統括理事会の理事達が来るという噂だよ」

「経営統括理事会、ですか。どうしてまたそんな上層部の人たちがいるに？」

「それが僕にもわからないんだよ。本来学園関連のことは運営本部に一任されているはずなんだ。理事会の人がここに来る理由はないと思つんだけど」

帝グループ経営統括理事会とは日本有数の大企業である帝グループの最高決定機関で、日本全国に散らばる帝グループ提携会社の経営全般を管理している機関である。

その中でも特に学園の運営を担当しているのが帝学園運営本部。学園に関する事柄はすべてこの運営本部が担当しているので、この学園にその上位組織である理事会の人間が来るということのは普通は考えられないことだった。

「ひょっとして、帝国祭の何かかな？ そろそろ私たちも準備始まるよね」

「帝國祭？ ああ、そういえばもうそんな時期だよな。でもたかが学園祭にわざわざ大手グループの経営陣たちが興味を持つていると見えないんだが」

「そりなんだよね、全然目的が分からぬから僕たちも困っているんだよ。こんなことは前例がないからすっかり混乱しちゃってね。何せあの帝兼継が直々に学園を視察するって言つんだから驚きだろ？」

「帝兼継、といつとあの経営統括理事長の？」

帝兼継の名を聞いた龍斗は顔をわずかにしかめる。

たつた一代にして現帝グループの体制を築き上げた凄腕実業家にして、現在もそのトップに君臨し続けている帝グループ本社の代表取締役社長。その経営手腕は世界でもトップクラスと謳われ、彼の影響力は政治業界にまで及んでいると噂されるほどの人物だ。

それに兼継はプライドが高くて自身の腕を信じて疑おうとせず、ほしいものは力ずくでも手に入れるという独占欲の塊のような人間だという話を聞いたことがある。

龍斗としてはあまりかかわり安いを持ちたくない人間の一人だった。

「うーん、でもそんなすごい人なら一度でいいから会つてみたいかも」

「はは、鳴月は意外と恐ろしいことを言つんだな。僕はできることなら一生会いたくないよ」

笑顔でそんなことを言つ遙香に真辺は苦笑いを浮かべる。しかしすぐに何かに気がついたように後ろを振り返った真辺の表情が真剣なものに変わる。

その表情の指す意味を瞬時に理解した龍斗がそのままの先を追っていくと、ちょうど黒い車が数台校門をくぐつて入ってきたところだった。

よく見ると黒塗りの自動車群は一台の漆黒のリムジンを取り囲むように列をなしており、政府の要人でも護衛しているかのような雰囲気が漂っていた。明らかにあれは生徒を送つてきましたという感じではない。

「まさか、もういらしゃったのか！？　まだ時間まで一時間以上もあるのに！！」

真辺が顔を青くしながら驚愕の声を上げる。それを知つてか知らずかその場から動けずについた三人の前で黒塗りの一団は静かに停車すると、そのうちの一台 リムジンの窓が緩やかに開いていく。

そこから顔をのぞかせたのは見る者を震え上がらせるような鋭い眼光を放つている老人の姿だった。

老人は立ち尽くす三人に目線を向けながらしわがれた声低い声で言い放つ。

「邪魔だよ君たち。私が通るんだ、道をあけるのは当然の義務だろう。そんなところで突つ立つてないでさつさとどつかに言つたらどうだ。私の視界に入らないでほしい。目障りだよ。」

どこか聞く者に従わなくてはいけないと思わせるような響きを持つた老人の声を聞いて、真辺と遙香はびくつと肩を震わせる。龍斗だけが老人の目を静かに見つめ返している。大の大人でさえ震え上がっているというのにただの生徒が全く動じた様子もなく自分の目を見つめ返してきたことに、老人はすっと 目を細める。

「……あなたが帝兼継、ですね。それで、俺たちに何かご用がありで？」

静かに紡がれた若干の敵意のこもつた龍斗の言葉に老人 帝兼継

はわずかに押し黙る。

「……君は鳴月龍斗だね。といつーことはこっちが鳴月遙香。ほう、写真で見るよりなかなか可愛い女の子じゃないか。あの老いぼれにはもつたいないな。……どうだ、お嬢ちゃん。うけに来ないかね？」

私たち帝一族はあなたを歓迎するよ」

突き刺す様な目線で全身を舐めるように見られた遙香はびくつと肩を震わせておびえるように後ずさる。

田をそらしたいのにそらせない。奇妙な拘束力を持つた視線に遙香は思わず体を守るように肩を抱こうとするがそれすらも許されない。

別に睨まれているわけではない、ただ目を向けられているだけ。それなのに、たったそれだけなのに体が石のようにも硬直してしまって言うことを聞いてくれない。

怖い、この人何か違う。

得体のしれない恐怖におびえる遙香の視界が不意に何かによつてさえぎられ、老人の顔が見えなくなる。恐る恐る顔をあげてみると、龍斗が遙香を背中にかばうようにして立っているのがわかつた。

兄がそばにいてくれる、私を守りうとしてくれている。

たつたそれだけのこと。兼継の視線はまだ遙香を捉えたままだったが、遙香は自分で心がゆつくりと溶けてなくなつていぐのを感じていた。

「何の用事か、と聞いているんです。くだらないことを言つてないで質問に答えてください」

「……ひぬといな。君に話しかけてはいないんだよ。邪魔をするんじゃない。それよりも…… 私に命令をする気かね？ 君はこの私にそんな口をきいてただで済むとも思つていいのか？」

「どうやら何も用事はないようですね。それでしたら俺たちはこれで失礼させていただきます。行こう、遥香」

軽く形式だけの礼をして龍斗は遙香の手をつかんでその場から去るうとする。

「待ちたまえ、私へのその不遜な態度は謝罪に値するぞ。謝罪の言葉くらいは置いていつてもいいだら」

その言葉を合図に周囲に止まっていた車が一斉に龍斗たちの逃げ場をふさぐように移動した。

それぞれの車からは黒いスーツを着た屈強な男たちが一人ずつ、計十人ほど出てきて、あつといつ間に龍斗たちの周りに黒い壁が出来上がる。

「ずいぶんと物騒ですね。脅しのつもりですか」

遥香を背中にかばいながら龍斗は兼継にうしろしそうな視線をおくる。

「ふん、この後に及んで私にそんな顔を向けるとは何と愚かな。素直に謝つておけばこんなことはならなかつたものを」

「やう言われましても、俺にはもともと謝る『気などありませんが』

本当に困ったような顔をする龍斗に兼継の頬がひきつる。

「……どうか、なら仕方ない。それではその可愛い妹君を謝罪の証にいたくことにしようか。もともとそのつもりで来たのだしな。なに別に取つて食おうというわけではないよ。ちょっと私の抱えている仕事をお手伝いしてもらおうと思っているだけなんだから」

一人を取り囲む男たちの中から一人が前に出てきて、遥香の手を

つかもうと手を伸ばす。

自分をとらえようと伸びてくる手に、遥香は恐怖で田を固くつぶる。ほかの男たちも龍斗を遥香から引きはがそうとして押し寄せる。一斉に動き出した男たちを興味のなさそうに一瞥した龍斗は特に慌てた様子もなく静かにため息をつく。

「何でも思い通りになると思つてこそのならそれは大きな間違いですよ。あなた方が遙香に触ることは絶対に許されない」

「ゴバッ、とこう空気を切り裂く音とともに衝撃波が吹き荒れる。襲いかかるうとしていた男達は正面から風の奔流を受けて吹き飛ばされ、自分たちが降りてきた車へと次々に激突していく。その全員が一撃で意識を刈り取られており、再び立ち上がるうとするものは一人もいなかつた。

衝撃波の中心に立つているのは金色の光をその田に宿した龍斗。その脇には田をつぶっていたために何が起つたのか理解しない遙香が龍斗に守られるようにしながら困惑の表情を浮かべていた。

「あなたは自分が一体誰に手を出そうとしてるのかを本当に理解しているのですか。愚かなのはあなたの方だと思いますが。遙香のことを俺たちがどれほど大切にしているのかをあなたは全く理解していない。もし本気で言つているなら鳴川家は総力を挙げてあなたを潰しにかかりますよ。聰明なあなたならこの意味がわかるはずだ。俺はおとなしく帰ることをお勧めしますよ。今回のこととは特別に彼らには伏せておきますから」

冷めた田線を向けながら淡々としゃべる龍斗に兼継は顔を真つ赤にして憤慨する。

「ふざけるな！ 学生じときがこの私に命令するんじゃない！ ど

「今まで虚偽にしおつて！ 私を誰だと思つている！ 帝グループ
経営統括理事長 帝兼継だぞ！！」

「知つていますよそれぐらい、あなたは有名ですからね。それで、
だから何だつていうんですか？ 自分が一番偉いとか言いたいなん
ら他で言つてください。正直かなりうつとうしい」

「き、貴様！！ 小僧が調子にのりおつて！ 何をしてある！！
こいつをはやく始末しろ！！」

兼継が怒鳴り散らすと、正門のほうからさりに何台もの車が入つ
てきてあつという間に龍斗を取り囲んだ。

数十台を超える車のすべてから先ほどよりも屈強な男たちが降り
てくる。先ほどのボディーガードたちとは違う、今回は護衛対象を
守るのではなく相手をたたきつぶすために鍛えられた男たちだ。

黒服姿の大男が並んでいるという光景はそれだけでなかなか威圧
感がある。ついに恐怖に耐えられなくなつて震え始めてしまった遙
香の隣に移動し肩を優しく抱きながら龍斗はざつとあたりを見回す。
龍斗一人に対して相手はざつと数えても三十人以上はいる。それ
だけの人数差を目の前にして龍斗の余裕の態度は一切崩れてはい
ない。そのことがさらに兼継を激怒させる。

「ええい、なんでもいい！！ 早くこの小僧を黙らせや ！！」

兼継の絶叫に、しかし男たちは誰ひとりとして動こうとしない。
いや、動けなかつた。彼らは敵を叩き潰すために鍛えられたプロフ
エッショナル、

しかしだからこそわかつてしまつた。目の前の少年はその存在を
もつて男たちに案にこう告げているのだ。

「これ以上近づくな、と。

少年から発せられている男たちのものとは比べ物にならないほど
の圧倒的な威圧感。それが彼らをその場に縛り付ける。近づけば間
違いなくやられる。あと一步でも近づこうものなら痛みさえ感じる
暇もなく一瞬で意識を刈り取られることになると感覚と経験で悟る。
否、悟らされる。

男たちと少年の間にはそれだけの実力差があり、そしてその差は
何があつても絶対に埋まることはない。

かなわない、わかつてしまつたが故に男たちは動く事が出来ない。

「な、何をしている！…… わたしと始末せんか！…… お前らが始末
されたいか！！」

命令を下したのに動こうとしない男たちに兼継はさらに顔を真っ
赤に染めて興奮しながら怒鳴り散らす。その兼継を完全に無視して
龍斗はおもむろに上空を見上げる。

「ああ、大変！」立腹のところ申し訳ないんですが、どうやらタイム
アップみたいですよ？」

龍斗のつぶやいたその言葉は周囲に響き渡ったプロペラ音にかき
消され、直後に強烈な風が吹き荒れる。その風にあおられて龍斗を
囮んでいた男たちはバランスを保てずに地面に片膝をついて風を起
こした物体、ヘリコプターを見上げる。

その側面には黄色の塗装で『鳴円』の一文字が書かれていた。

「鳴月？まさか、鳴月龍一郎か！？いつたい何の用だ！…」

兼継の声にこたえるようにヘリのハッチが開かれて、その中から誰かがパラシユートなしで（・・・・・・）飛び降りてきた。三十メートルほど上空から飛び降りてきたというのに、その男は階段を一、二段飛び降りただけのような動作で軽々と地面に着地すると筋を伸ばして驚愕の色を隠し切れない兼継へと向き直る。

「父さんでなくて残念でしたね。いや、今回は幸運だった、と言つべきかな？直接会うのは今回で何度目になるんでしょうか。十回目？いやもつと少なかつたかな。まあ、ともかくお久しぶりですね、帝兼継さん」

ヘリから飛び降りてきた男はにっこりと人当たりの良さそうな笑顔を兼継へと向ける。

「……なんだ、鳴月龍彦ではないか。貴様に用はないぞ。何をして来た」

男の顔を見たとたん、兼継はつまらなそうに顔をそむける。その態度を見た龍彦は困ったような笑みを浮かべた。

「そうですか、それは何よりです。私たちはなるべくあなたとは何かわりたくありませんから。ですが今日はあなたに用はなくともこちらには重要な用事がありまして。……うちの遙香が知らないおじさんに家へ来ないか、と声をかけられたという連絡が入りましてね。父親として娘の安否を確認するために急いで飛んできましたよ。

不審者に狙われた娘を心配しない親はいないでしょ？　あなたならご存知じゃないかと思いまして」

「ほう、そんなことがあったのか。しかし私は知らんな。なぜ私にそんなことを聞く？」

「知らない？　本当にそうでしょうか。ではそいらじゅうに転がつているこの屈強な男たちはいったい何なんでしょうね」

楽しそうに、しかし田だけは一切笑っていない笑顔で龍彦は兼継を問い合わせる。

「……そいつらが勝手に暴走しただけだらう。私は関係ない」

「はは、何とも都合のいい言い訳ですね。ですがこの状況を見るにその暴走を止めたのはどうやらつちの息子のように感じますが。雇い主であるあなたは止めなかつたんですか？　しかもその後に来た人間も混ざっていますよね。底で膝をついている方々とか」

「だから私は知らんと言つている。そいつらが勝手に暴走したんだ。何度も言わせるな、しつこいぞ鳴月龍彦」

「そうですか、あくまでもお認めにはならないと。わかりました。それならばこちらにも考えがありますよ。」

やう言ひて携帯電話を取り出した龍彦はどうかと連絡を取り始める。

「……ええ、そうです、はい。……ですか。ええ、ではお願ひします」

「……貴様、いつたいどこと連絡を取った」

ギラギラと両眼を不気味に輝かせながら睨みつける兼継に、龍彦はパタンと携帯を折りたたんでポケットにしまいながら何事もなかつたかのように平然と答える。

「なに、大したことではありませんよ。ちょっと知り合いで頼みごとをしただけです」

「何？」

龍彦の返答の意味を測りかねた兼継は疑問の声を上げる。しかしその答えはすぐにやつて來ることとなつた。

突如兼継の携帯が鳴り響く。ちらり、と横目で携帯を見ると、兼継は龍彦を睨みつけたまま通話をオンにする。

その瞬間通話口から大音量で叫び声が聞こえてきた。

『大変です代表！！ 帝グループ提携企業の帝重工の株価が暴落しています！！』

「何だと？ 今朝見たときはそんな兆候はなかつたが、何かの間違いではないのか？」

『そ、それがほんの今しがた急に暴落を開始しまして、たつた今六割を切つたところで…… 待ってください！ な、なんだこれ、はやすぎる！ もう五割を切れます！！』

「ばかな！ いきなり下落を始めただと！ ありえん！ そんなことがあつてたま…… まさか貴様か！ 一体何をした！！』

「何のことでしょうか？ 私は何もしていませんよ、私は。先ほどあなたと同じようにな」

「……出せ。一度本社に戻る」

兼継は何か言いたそうに口を開け、しかし何も言ひとなくそのまま口を閉じる。

その後忌々しげに低くつぶやくと、苦虫をかみつぶしたような顔をした兼継を乗せたリムジンは静かな挙動で発進する。

「まったく。あの人もなかなか執念深いなあ。まさか直接本人に会いに来るとは思わなかつた。……で、君たちはこいつまでそこに転がつてゐるつもりだい？」

学園を出していくリムジンを見送りながら龍彦は苦笑してつぶやいた後、周囲をぐるりと回んでいる男たちに意識を向ける。

何気なく放たれた言葉のようであるがその実、暗にさつと帰れ、と言つてゐるのがだれが聞いても理解できるような声色だった。

それを聞いた男たちはまだぐつたりと意識を失っている仲間を車に押し込むと、逃げるようにして学園を出るとリムジンを追いかけ行つた。

やつと周囲が静かになつたところで、もう大丈夫だと判断した龍斗は開眼を解く。

「やつと行つたか。怖い思いをさせたね、ごめん遙香。だいじょうぶ」と

安心させようと語りかけながら後ろを振り返ると、やつと遙香がその場に崩れ落ちようとしているところだった。

龍斗が慌ててその体を支えようとしたおかげで倒れる」ことはなかつたが、遙香はそのまま地面にしゃがみ込んでしまった。

「えへへ、『めんねお兄ちゃん。ちょっと立てないかも』

顔を真っ青に染めながらも力なく笑おうとする遙香を見て、龍斗は龍彦のほうをちらり、と横目で見る。

その意味するところをしっかりと理解した龍彦は、今にも倒れそうになつている少女の正面にしゃがみこんでその肩にそっと右手を添える。

「ちょっと疲れちゃったみたいだね、でも大丈夫だよ。すぐに良くなる」

龍彦が静かに目を閉じるとその体内に龍王の力が満たされる。

そこに龍一郎や龍斗が開眼時に放つような威圧感はなく、むしろ優しく包み込むような安心させる何かを感じられた。やがて龍彦によつて掌握されたエネルギーはその質を変化させながら右腕へと収束され、そのまま遙香へと流れ込んでいく。すると遙香の顔色が見る間に戻つて行き、こわばっていた表情も徐々にほぐれていつも通りの穏やかな表情を取り戻していく。

遙香の顔色が回復しきったところでゆっくりと両手を開けた龍彦は、遙香の肩から右手を離して彼女の頭の上にぽんつ、とのせると優しくなでる。そしてゆっくりと立ち上がると、龍斗のまわりに向きなれる。

「さて、実は重要な会議をすっぽかしてここまで来てしまってね。ちょっと急いでいるんだ。龍斗、後は頼んだよ」

「わかった。父さん、ありがとう

「おいおい、親が娘の心配をするのは当然のことだらう、もちろん龍斗のこともね。だからお礼なんかいらないよ。それじゃ、本当に行かないとまずいから。行つてきます」

「ああ、行つてらつしゃい」

「お父さん、気をつけでね」

龍彦は大きく頷くと上空で低空飛行を続けていたヘリを見上げてその距離を確認する。そのまま膝を曲げて反動をつけると勢いよく地面を蹴り跳躍する。

ふわりと宙を舞つた龍彦の体は、吸い込まれるようにしてヘリの中におさまると、ハッチを閉じたヘリコプターは大きく旋回して飛び去つて行つた。

「あつははは、そら大変やつたなー。ホンマ^{龍斗}と一緒にいると話のネタに困らへんわ」

「笑うなよ、人事だと思つて。結構危なかつたんだぞ。父さんが来なかつたら今頃どうなつていたか」

ははは、すまん。と田の端に涙を浮かべながら笑いをこらえている少年に龍斗は疲れたため息をつく。

帝学園高等部校舎、その一年生の教室内で龍斗は前の席に座っている少年 篠崎一馬と話していた。

「せやけど結局は龍斗一人でもなんとかなつたんやない？『あれ』使つた龍斗は無敵やんか」

あれという単語にわずかに不思議そうな顔をした龍斗だったが、すぐにその意味を理解すると首を横に振つた。

「いや、あの状況で遙香を守つさる血身がなかつたんだよ。開眼は力のセーブが難しいから。下手に動いて自滅するのだけは避けたかつたからな」

「あー、そやつたな。龍斗は遙香ちゃんにゾッコンやもんなー。自分のせいでの遙香ちゃんに傷がつくなはやっぱ許せへんか。あー、なんか羨ましなつてきたわ。オレも遙香ちゃんみたいなカワイイ妹がおつたらよかつたのになー」

「……誤解を招くような言い方はやめる。ゾックンしてもう死語だ

と思つんだが。それに一馬には理紗さんがいるだらう? 「

龍斗の口から出た理紗、といつ名前を聞いたとたんに一馬は嫌そ
うに顔をしかめる。

「よせや、姉ちゃんは姿はいいけど性格が最悪やねん。龍斗は家
での姉ちゃんを知らんからそんなことが言えんのや。あれは悪魔や
で。人の皮をかぶつた悪魔や。せつと腹ん中はどす黒いもので満た
されてるんやで」

一馬は一人腕を組みながらうつと頷いている。

そんな一馬の背後にゆらりと忍び寄ってきた少女が、それに気づ
いていない一馬の後頭部を思いつきりひっぱたいた。バッチーンと
いう音が気持ちいいぐらいに教室に響き渡る。

「～～～～っだあ！ 痛い！ なんやー！ いきなりなにすんねん
！」

急に後頭部に走った激痛に叫びながら後ろを振り向いた一馬の目
に入ったのは、ショートカットの髪を揺らしながら一メートルほど
のハリセンを手に持つて左手のひらをポンポンと叩いている少女の
姿だった。

自分を見下ろす少女の顔を見て一馬は大きくため息をつく。

「やっぱり恵美や、痛いやないか。あまりに痛すぎてリアクション
取りづらいねん。ツツコミにも限度つてもんが……つてハリセン！
？ まさかそれで叩いたんか！？ そんなもん学校に持つてくんな
や！ 首が外れるかと思ったわ

いや、リアクションとかの前にまずハリセンに気づけよ。と龍斗

は心の中で一馬にツッコムを入れる。

「なーにが悪魔よ、あんたのお姉さんすつゞくいい人じやない。この前だつて駅前でお年寄りの荷物代わりに持つてあげてたのよ。あんなにやさしい人はいないわ」

「無視！？」オレの抗議は完全無視かい……まあそれはいいとして、そんなわけあらへんて。姉ちゃん自分が買い物行くときはいつもオレを荷物持ちに連れていくんやで。あの姉ちゃんがそんなことするとは思えへん」

「あら、女の子の買い物に男の子がつきあうなんて当たり前の」と
じゃない。女の子に重たい荷物を持たせる男なんてどうかしてるわ」

「理不尽や！ 横暴や！ 男女差別や！ みんなそんなんだよー、
みたいなこと言われてもオレは信じへん。そ、そいや、龍斗、龍
斗はどうなん？ やつぱり荷物持ちは嫌やわ？」

「そんなことないわよ、リュウは絶対持ってくれるわ。もうよね？」

ものすごい剣幕で一人に詰め寄られてさすがの龍斗も少しだじりいた。

「あ、ああ、そうだな。俺は普通に持つけど……」

その言葉を聞いた一馬は床に両手をついてがっくりとうなだれる。一方恵美はといふと腰に手を当てて勝ち誇ったように笑みを浮かべている。

「ほらみなさい。リュウはあんたと違つて優しいんだから。少しは見習いなさいよね」

「ウソや、龍斗も恵美の肩を持つんか。なんやーの四面楚歌、でもオレは認めへん」

「フフーン、だからあんたはモテないのよ。顔はそこそこいいのに性格が男としてなつてないもの。だいたい何なのそのエセ関西弁、今時流行らないわよ」

「ほつとけや！ 別にええやん俺が好きでやつてんねんから。つてかもはや姉ちゃん関係なくなつてるし！ これただオレが罵倒されてるだけやんか！！ だいたい恵美も人のこと言えるほどモテてへんやん。やっぱそれも性格のせいなんとかやつん？ パッと見はえらい美少女やのに、実中身は世にも恐ろしい鬼の子でしたー、ってな」

「な、なんですか！ だれが恐ろしい鬼の子よ、こんなにかわいい女の子のどこが鬼だつて言うのよ…」

「はつ、自分で自分のことカワイイとか言つなや。恥ずかしくないんか…って危なつ！ ちょおまつ、ハリセンで連打はあかんて、ホンマシャレにならへんやー！」

ぱしづしとハリセンで叩いつとする恵美に両腕でガードしながら二人は口論を続けていく。

その様子を巻き込まれないようにと黙つて見ていた龍斗だったが、そのほほえましいともいえる光景について思つたことをそのまま口にしてしまつ。

「……すこぶると仲がよせりうだな」

「「だれがー」「こつと仲良しなんで」「わから願いトボム（や）」

「……」

全く同じタイミングで振り向き同じ言葉を同時に叫ぶ二人に、や

っぱり息ぴつたつじやないか、と龍斗は苦笑いを浮かべる。

今度は内心に呪つだけ口には出なかつたが。

二人のヒートアップしていた口論がちょうど途切れたタイミングで教室のドアが開いて先生が入ってきた。

「遅れすぎなかつたな。ほら、ホームルーム始めるからみんな席について」

そういう教卓の前に先生が立つと教室をぐるりと巡回して全員着席していることを確認する。

「えー、もう知っている者もいるとは思うが今日は時間割が変更になる。まずは第一講堂で全校集会だ。身だしなみをしつかりしておくよ。それからその後なんだか、授業はやらないで帝国祭の役員決めをやることになった。急な話だが今日の放課後には役員会議があるから今日中に決めないといけないんだ。各自考えておくよ。以上だ。では各自移動を始めてくれ。くれぐれも時間に遅れないように」

連絡事項を全て告げ終えると先生はすぐに教室から出て行つた。それと同時に一馬が体を反転させて椅子の後ろに腕をかけながら龍斗の方を向く。

「なあなあ、今日の全校集会って帝の祖父ちゃんが来るんやつたよな。せやつたら今朝のこと考へると遙香ひやんまざいんとうやう？」

「そりだな、だけど幸いなことに全校集会は整列形態が指定されて

ないから、できるだけ遙香の心配にこよつと頬つてる

「やつか、そういうの学園はほんないとひるで自由やつたもんな。ともかくそれで決まりや。ほら早く行くで、遙香ちゃんの分の席もしつかりとつとかなあかんからな」

「やけに乗り気だな。何があるのか？」

「こつにもましてやる氣に満ちてこる一馬に龍斗が首をかしげていると、一人の元に恵美がニヤニヤとした笑みを浮かべながら近寄ってきた。

「どうせ落ち込んでる遙香ちゃんに優しい言葉でもかけて好感度アップやー、とか考てるんでしょ」

「なつ、や、そんあわけあらへんがなー。オレはそない汚い手は使わへんでー」

だらだらと冷や汗をかきながら必死で取り繕おうとしている一馬。だれから見ても嘘をついてるのが明白である。

「どうだか、あんたの考えることはいつも単純だから。それより行あまじょうづよ。早いうちに遙香ちゃん捕まえといたほうがいいんでしょ」

「ああ、やうだな。そろそろ行くか

「あ、ちゅ、まつりや、おいてかないで。オレも行くんやから」

恵美と一人で教室を出ようと歩き出したのを見て一馬も慌ててそ

の後をついていく。

*

*

*

「お、あれどちやう? わーい、ハルカちゃん、こひちやーひち
ー」

高等部校舎から五分ほど歩いた場所にある第一講堂、帝学園の全校生徒約二千人を収容してもまだ余裕があるほど広い空間に続々と集まつてくる生徒達の中にリュウト達三人も一緒に集まつていた。その一千人を超える人混みの中に探していた少女の姿を見つけた一馬は大声でその名前を呼ぶ。

「バカ、大声出すんじゃないわよ。恥ずかしいじゃない。っていう
かこの人混みの中よく見つけられるわね」

「アホやな、人混みの中やから見つけやすいねん。遙香ちゃん人気
だから周りよりも人口密度が高いところ探せばすぐ見つかるんや。
遙香ちゃんは学園のアイドルやからな」

「アホとか言つな。ホント昔からあんたはそういうことだけは頭の
回転が速いわよね。普通の勉強は全然ダメなのに」

「もちろんや、人間学力じや測れないことなんていっぱいあるねん
で。美少女サーチ能力に関しては学園でトップとれる自身あるわ」

「それ自慢できる」とじやないわよ。ただのストーカーじやないの
?」

「ちょっと、ストーカー言つたや人聞きの悪い。人探しには結構便利な能力やねん。美少女限定やけど」

「やっぱ使えないじゃないの」「このストーカー男」

「だからストーカー言つたやー。ええやんもう行けりうで。遥香ちゃんの隣誰かに取られたらたまらんわ」

「ほら、やっぱあんたはそれが目的じゃない。実は遥香ちゃんのこともストーカーしてんじやないの？」

「んなわけないやろ！　もうストーカーネタやめよつや、地味に傷つく！　オレってそんなに信用ないん！？」

「そんなことないわよ。私はみじんも信用してないから」

「そつか、よかつたー、そんなことないんかー…………ってよくない！　よく考えたら信用されてないやん！　言つてることが全然違う！！　危ねー、危うくだまされるとこひやつたわ」

「ちつ」

「舌打ち！？　今舌打ちしたやん！　え、なに、オレっていつからそんな扱い！？」

「やーて、遥香ちゃんはどこかなー？」

「あつあつスル！？　やっぱオレの」とは【完全無視ですか！？】

「

「きやつ、ちよつとやめてください。」の入ストーカーです」

「だああああ……だからもうストーカーネタはやめ……」

ぎやあぎやあと騒ぎながらも一人は器用に人混みをかき分けて遙香のいる場所へと近づいていく。

完全に話の輪から離れている龍斗も、もういつものことなので特に気にすることなく一人のあとを追いかけていく。

しかしやはりどうみても仲がいこようにしか見えない、と龍斗は一人の後ろ姿を眺めながら思う。正直お似合いの「一人だと思つし、そういうった噂が流れているのを聞いたのは一度や二度のことではない（そのたびに本人達は否定し絶対認めようとしなかつたが）。龍斗でさえもこそ本当に付き合えばいいの」と思つているから이다。

そんなことを考えながら歩いていると遙香とのいる場所までたどりつく。周りを見回してみると確かに男子のほうが圧倒的に多く、一馬の言っていたこともあながち間違いではなかつたのか、と龍斗は内心で感心する。

正直なことを言つと龍斗もあまり信用していなかつた。

「遙香ちゃんおはよう。リュウから聞いたわ。なんだか今朝は大変だつたみたいね」

「あ、恵美先輩おはよう」やむこおす、あれ、一馬先輩も一緒にですか。あ、お兄ちゃんもいる。みんなでどうかしたんですか？」

笑顔で恵美に挨拶した遙香は三人がそろって自分を訪ねてきたことに不思議そうな顔をする。

「ちょっとね、まあ気にしないでよ。そんなことよつ隣あいてる？一緒にいてもいいかしら」

「あ、あいりますよ。どうだ。」

そういって遙香は少し移動して人数分のスペースを確保する。

「ありがとうございます、それで、そっちの子は？」

恵美は遙香の隣で龍斗たちがここに来た時からずっとおひおひとしていた少女に声をかける。

すると少女はいきなり声をかけられたことによつほど驚いたのか、ぴつ、という奇声をあげて遙香の後ろに隠れてしまつ。その反応がショックだったのか恵美の頬が少しひきつっていた。

「あ、違うんだ。別に怖がつてるわけじゃなくて、ちょっと人見知りが激しいだけなんだよ。あ、紹介するね。この子私のクラスの委員長をやってる小野寺皐月ちゃん。」

おひおひさつき

「あ、あの、は、はじめまして。お、小野寺臥月と申します。び、
びびりや、よ、よろしくお願ひしますつー」

あたふたと早口で言つと、臥月は勢いよく頭を下げる。ビニカ小
動物のような可愛らしき印象を与える少女だった。

「な、なんてことや、こんなにカワイイ娘を見落としたやどー」

篠崎一馬一生の不覚！

田を見開いて驚愕の表情を浮かべて凝視する一馬に恵美は大きな
ため息をつく。

一方一馬の「カワイイ」という単語に過剰反応してしまった臥月
は顔を真っ赤にしてしまつ。

「かつ、かわいいなんて、そんな、わ、私なんて全然」

「ああ、もうかわいすぎる！.. あかん、こんなん反則や。耐えら
れるわけあらへんやん！」

今度は悶絶し始めた一馬にもはや突っ込むことさえもあきらめた
恵美は冷たい視線を送つた後、はあ、とため息をついて臥月に笑い
かける。

「じめんなさいね、これは無視しちゃつていいから。それより私は
恵美つていうの。水無月恵美。気軽に恵美つて呼んでもらつて構わ
ないわよ」

「あ、恵美先輩、ですか。よ、よろしくお願ひします。そ、それで、
ああの、そちらの方は、もしかして……」

恵美にも深々とお辞儀をした皐月は恐る恐るといった感じで龍斗のほうをちらちらと伺い見る。

その視線に気がついた遥香が龍斗の代わりに紹介する。

「このはね、私の兄ちゃんなんだよ。名前は龍斗っていうんだ」

「よろしく」

遥香が紹介してくれたので、特に言つことがなくなってしまった龍斗はとりあえず微笑んで挨拶をしておく。

しかしここで忘れてはならないのが龍斗の完璧と言つて申し分ないほどの姿。遥香とともに美形兄妹として名が知られている龍斗は学園の女子生徒たちに絶大な知名度を誇る。当然近寄ってくる女子も少なくないのだが龍斗に直接言いよつてくる人間は皆無に等しい。

そこにはファンクラブの存在が大きく影響していた。

『龍斗と遙香にあこがれる人間が集まって結成されたファンクラブ』
『燈籠会』

一から行動を起こすではなく声をかけられることを悲願とするこの燈籠会の会員が龍斗や遙香に直接接觸を図ろうとする者を許さない。そのおかげで絶大な人気を誇る二人は普通の学生生活を過ごせているのである。

ちなみにこのファンクラブの存在を当の本人たちは認知しておらず、燈籠会の会長が実は篠原一馬だったりするのだがこの事実はほんの一握りの会員しか知らない。

そして皐月もこの燈籠会の会員だつたりする。つまり龍斗と会話

をすることが夢だったわけなのだ……

(はわわわわ、――「ツツー、――ツツー微笑んでくれました！ やつぱりかっこいいですよーー！）

頬に手を当てて顔を真っ赤にしながら悶絶していた。

その理由が全く理解できない龍斗達は全員が疑問そうな表情を浮かべる。その中でただ一人、一馬だけがみんなとは違う心情で眺めていた。

(しもた、やらかした　　！ 最近こいつの少なくなつとつたらすつかり油断してたわ。こいつの笑顔は女の子にとつては危険すぎる！ あかんで、これはあかん。空気が桃色になつとる… どうするん！ デリヘルの状況！！ オレじゃ収集つかへんわ！！　　)

だらだらと冷や汗を流しながら頭をフル回転させて打開策を探す一馬。しかし救いの手は思わず方向から差しのべられた。

「おや、遙香さんではありますか。お噂にたがわす可愛らしい方だ。あ、僕は帝路弘あきひろと言います。以後よろしく」

突如として人混みの中から姿を現した少年は、遙香をまっすぐ見据えて人のよさそうな笑みを浮かべる。

(げ、帝やんか！ なんでこいつがここにおんねん。で、でも今は助かった！ ナイス！ ナイスタイミングや帝！ でも人選ミスつた！！ あんたはお呼びでないで！）

心中でそんなことを叫びつつもどうあえず皐月が自分を取り戻し

たよつなのでほつと胸をなでおろす。

「やつしょあんた確か学園長の息子とか言つてた奴よね。なんであんたがここにいんのよ」

びしつゝと人差し指を突き付ける恵美に啓弘は眉をつり上げる。

「……人を指差さないでいただきたい。僕がここにいてはいけない理由もあるんですか？」

「大いにあるわね、遙香ちゃんが汚れるといけないからやつてどうぞ行きなさい」

「まるで僕が汚いとでも言いたげな物言いですね」

「ええ、そうね。少なくとも私はそのつもりで言つたわ。違つた意味に伝わってしまったならごめんなさい」

「あ、でたで恵美の支離滅裂な言動。でもそれオレもなんとなくわかるわー。ほら、存在が汚いみたいな？」

「……下手に出てみればよくもまあ言つてくれたものですね。僕が帝の血を引く人間と知つての狼藉ですか？」

声を荒げる啓弘に今まで黙っていた龍斗が口を開く。

「まあ落ち着けって一馬、恵美。なんかお前ら黒いぞ。それに帝も、何か勘違いしてないか？ 帝の血を引いてるってだけで威張るのは間違つていぬと思つが」

「そりそり、それや。そういうところが汚いっちゅうねん。親がどうだけ偉かろうとあんた本人は何の権力ももつてへんやん。漫画に出てきそうな典型的なお坊ちゃんタイプやん」

「あ、それわかるわ。なによ、たまにはいい」と嘗めにぎやない

「 もの、帝にせりの言葉がぴつたりやねん。 たまにせは余計やナビ
な」

つらつらと毒を吐いていく一人に龍斗は苦笑いを浮かべる。せつかく仲裁に入ったのにあっさりと蒸し返されてしまった。

しかし学園長の息子を相手にここまで言える人はこの学園にはなかなかいないだろう、と同時に感心もしていた。現に遙香と皐月はどうしたらいいのかわからずおろおろとするばかりである。

「篠崎！ 水無月！ これ以上の侮辱は許しませんよ！！ 父上の耳に入つたらどうこうことになるのかわかっているんでしょうね！」

「あ、また親の権力に頼つた」

ぴつたりと息のあつたツツ「//」を入れる一馬と恵美に思わず龍斗は吹き出してしまう。

笑われたことかよ」と僕に障ったのか
壁弘は肩を震わせて怒り

「さう、君たち。いい加減にしないと本当に父上に報告しなくてはいけなくなりますよ!!」

「なんやなんや、このぐらいで。ホンマちつちやい奴やな。こんなんでいちいち頼られてるようじや帝の父ちゃんも大変なんとかやうか」

わざとらしく手のひらを上に向けてやれやれ、と首を振る一馬。その横で恵美もさらに追い打ちをかけようと口を開いたところで、そのままある一点を見つめて固まってしまう。

その視線の先には不自然に人混みが途切れている空間ができる限り、それは徐々にこちらへと近づいてきていた。

ああ、やっぱり来たか。と龍斗は小さくため息をついて一步前へと出てその空間と遙香の間に体を滑り込ませる。

ちょうど移動し終えたところで龍斗の前方の人混みが大きく左右に分かれて中なら高級そうなステップに身を包んだ四十前後くらいに見える男が姿を現した。その後ろにはボディーガードらしき一人の人物も見受けられた。

見覚えのある顔、というのも今朝襲つてきた男たちの中に同じ人間がいたのを龍斗は確認していた。

「これはこれは、啓弘のお友達かな？ 息子がずいぶんとお世話になつてゐるようだ。私のことは……もちろん知つてゐるね。この学園の理事長をしている帝忠^{ただのり}則、名前ぐらいは聞いたことがあるだろ

う?

その場の空気が凍つたかと思った。

威厳に満ちた声で一馬たちに話しかける忠則は順番に彼らの顔を見回していく。それが龍斗のところに回ってきたところでわざかにその両目を見開く。

「……おや？ これは驚いた。誰かと思えば鳴月家の御曹司と御令嬢ではありませんか。今朝は父上 兼継が大変気に入つたとおっしゃつておつましたよ」

そう言いながら龍斗の陰に隠れるようにして立っている遙香のほうへと視線を向ける。ひつ、と小むく悲鳴を上げて遙香は反射的に制服の端をつかむ。

「ははは、どうやら私はあまり好かれてはいないうだ。悲しいことだね。別に取つて食おうといつもりは全くないのに」

わざと遙香のアラウマをえぐるような言葉を吐く男に龍斗は奥歯をかみしめる。ここで荒事を起こすわけにはいかない。

周りの生徒を巻き込みかねないし、第一相手はこの学園の理事長だ。問題を起こした生徒を退学処分にすることなど造作もないだろう。そうなつてしまつては学園内で遙香を守る存在がいなくなってしまう。

「ほう、相手を選ぶだけの知恵はある、と。つつき後先考えずにつかみかかるものだとばかり思っていたが……。龍一郎といい龍彦といいどうしてあなたの方の家系は思い通りにいかないのか」

「お、お兄ちゃんをバカにしないで！」

兄が馬鹿にされたことがよほど悔しかったのか遙香は本人以上に

憤慨する。よほど勇気を振り絞つての行動だったのだらう。体を震わせながらも制服をつかむ手にさらに力がこもる。

ジロリ、と目だけを動かして遥香を一瞥した忠則は吐き捨てるよう言い放つ。

「小娘が。貴女に話しかけているわけではないんだよ。他人の会話に口を挟まないことだね」

しばらくそのまま睨みつけていた忠則だが、やがて小さく舌打ちをすると踵を返して元の方向へと引き返していく。その背中を啓弘が慌てて追いかけていく。

一人の姿が人混みの向こうへと消えたところで一馬がはあーっ、と長いため息をばく。

「なんやあれ、子も子なら親も親やな。親子そろっていい性格しとするでホンマ。てか龍斗もよく田舎わせられるよな。オレやつたら失神してしまつわ」

「まあ、俺は毎日あれ以上に恐ろしい目にあつてゐるからな。そんなことより……。遙香、大丈夫だよ。もう理事長は行つたから」

忠則の姿が消えてからもまだ青ざめた顔で龍斗の制服の端をつかんだままだった遙香に龍斗は優しく話しかける。

「で、でも、最近なんか誰かに見られてるよつた気がしてたんだよね。わ、私もしかして狙われてるのかな……」

それでもまだ不安げな表で見つめ返してくる遙香の頭に龍斗は手を置いて笑いかける。

「大丈夫だ。俺がついてる。それに父さんや祖父ちゃんだつているんだ、あの人たちだつてそう簡単に手は出せないよ」

「そ、そりなの、かな？　だいじょうぶ、なのかな？」

「リュウが大丈夫つて言つてるんだから大丈夫よ。それとも遥香ちゃんはリュウのこと信用できない？」

恵美の言葉に遙香は身を乗り出して反論する。

「そんなことない！　信用してると、お兄ちゃんがいれば大丈夫。でも、でもやっぱり不安だよ。私のせいでもみんなに迷惑がかかつちゃうんじゃないから」

その言葉を聞いた一馬と恵美は顔を見合させてやれやれ、といつ風に大きくため息をつく。

「なんや、そんなこと気にせんでええねん。オレ達は好きで遙香ちゃんのそばにおんねんで。これぐらいのことで離れていつたりはせえへん。迷惑なわけあらへんやないか」

「そりよ、私だつて一馬と同じ気持ち。遙香ちゃんはもつと周りの人を頼つていーのよ」

「そ、そりだよ遙香ちゃん。私のことだつてもつと頼つてほしいな。力になることはできないかもしね。でも話を聞いてあげるくらいならできると思つんだ」

「あ、ありがと。みんな」

次々とかけられる言葉に遙香の表情が少し和らぐ。それでもまだ完全とは言えないのを見た恵美と一馬にアイコンタクトをとる。

「そ、それでいいのよ。あとはドーンと私たちに任せちゃこなさい。一馬が全部やつてくれるわ」

「え、そこでオレー？ 普通は龍斗の名前が出てくるんとちやうんか！」

「なに言つてんのよ、人任せにするんじゃないの。あんただつて男でしょ。しつかり女の子を守つて見せなさいよ」

「まてまてまて、恵美はどうなんや。自分は人任せでええんかい」

「私はほら、女の子だから」

「ああ、せやつたな。すまんすっかり忘れとつたわ」

「な、なかなか言つじやない。私のこともうちゃんと守りなさいよね」

「えーべつに守らなくても恵美なら一人で大丈夫やん。自分で何とかできるやうり？」

「大丈夫じゃないわよ！ 私だつてか弱い女の子なんだからね」

「えー、叫びながらか弱い言われてもなー。全く守りたいつちゅー気にならないねん」

「……ホントに言いたい放題ね。あとで覚えときなさいよ」

「さてわからんなー、ちゃんと覚えとるか自信ないわ。一、二歩ぐらい歩いたら忘れるんちやうか？ 恵美のほうが」

「私は一ワトリか！－ どんだけ馬鹿にしてんのよー。」

今までのシリアスな雰囲気が一人の馬鹿騒ぎによってかき消されていく。そんな姿を見て遥香もようやくいつもの笑顔を取り戻していた。

それを確認すると一馬と恵美は遥香に見られないようじつそりと顔を見合させて親指を立てる。一人の口論が演技だとわかつていい皇后はまたおろおろと二人を交互に見ていく。

いつも通りのあたたかい時間。

その光景を眺めながら龍斗は今朝牧野が言っていた言葉を思い出していた。

最近遥香の周囲が騒がしい。これはおそらく帝に関係する人間が遙香を狙っていたということ。彼らの目的が何なのかはわからない。しかし兼継や忠則が姿を見せたという事実は相手が確実に何か企んでいるということを物語っている。

おそらくこれからもあの一人は執拗に遙香を狙ってくるはずだ。そうなれば本当の意味で遙香に安全だと言える場所は限られてくるだろう。

でも、それでもせめて遙香だけはこの優しい時間の中で過ごしてほしいと願わずにはいられない。

龍斗は忠則が去つて行つた方向を静かに見つめる。

「」の遙香の過ごす平穏な世界を、あんな奴らに踏みにじ

りませしね。

8・1・プロジェクト・マネージャム

帝株式中央本社、この地上五十六階建てといつもその超高層ビルの最上階。通称『コンフィデンシャルフロア』と呼ばれているそのフロアには部屋が二つしかない。一つはフロアのほとんどを利用しつくられた統括理事長室。そしてもうひとつはその理事長室に埋もれるようにしてつくられた小さな部屋。

本社に到着した兼継は迷うことなくその小さな部屋に入っていく。

部屋の中に照明の類はなく、代わりに壁を覆うほど大型のモニターの放つ光がうつすらと部屋内を照らし出していた。部屋の中央にはモニターと向かい合うようにして肘掛椅子が一つだけ置いてあり、それ以外のものは存在しない。

その肘掛椅子に兼継は身を沈める。

彼の見つめる大型モニターには無数のウインドウが展開されていて、テレビ電話のようにそれぞれのウインドウに一人ずつ映っている。

経営統括理事会、これからその重要な会議が始まろうとしていた。

帝グループの経営統括理事会には会議場というものが存在しない。それは多くの提携会社を抱えるが故に全員を収容する場所が確保できることと、理事たちが世界中に散らばっているために一か所に集まることが難しいという理由から来るものだつた。しかし理事会がすべての会社を統括している以上会議をしないというわけにはいかない。

だから経営統括理事会は各会社に必ず設置されているのよくなモニタールームで行われる。

「状況を。現在の帝重工はどうなっている」

兼継の発したその言葉が会議の始まる合図となる。

「現在取引開始時の四割を切っています。しかしこれ以上下がることはないかと。」

「「ひからは鳴月龍一郎が怪しい動きをしている、といつ情報をつかんでいます」

「補足します。鳴月龍一郎が方々に『帝重工がなにやら面白いことをやつてこらへるらしい』と言つていることが判明しました」

「おそらくそれが我々に不信感を抱かせたのかと」

「現時点では帝重工以外の株価に影響はありませんが安心はできない状況だと思われます」

「理事長、これは明らかに鳴月グループの策略と考えてよろしいか」と

世界中の理事たちから次々と報告される情報の全てが龍一郎が関「』していることを示していた。そのことに兼継は強く奥歯をかみしめる。

「これが本当にあの老人によつておられたものだとするならば本来は何の痕跡も残つていなければならないはずなのだ。それなのに今回はそれを隠すどころかむしろ見つけてくださいと言わんばかりに派手に動いている。これでは情報をつかんだというよりは掴まされたといったほうが正確だわつ。」

そんなことも知らないで我先に報告しようとする理事たちに兼継は苛立つていた。

おそらく彼らは鳴月龍一郎の指示のもとグループが動いたと考えているのだろう。たつた一人の人間に何ができるものか、と。しかしその考えは間違っていると兼継は断言できる。常識が通用しない人間だということを知っている。

鳴月龍一郎という人間はそんなに甘い人間ではない。奴が本気になれば今頃手を打ったところでもう手遅れになつてえいたことだろ。単体でこれだけの力量。これに鳴月グループの組織力が加われば帝グループがどれだけ甚大な被害をこうむることになるかなど想像するだけでぞつとする。

もしそんなことになれば帝グループはおわりなのだ。

(　まだ先の話だと思っていたが、この辺りが潮時なのかもしれんな　)

兼継は全モニターに対して音声通信をつなぐとおもむろに椅子から立ち上がる。するとモニターのすべてが沈黙して兼継の言葉を待つ。

「聞け、理事たちよ。話が帝グループは今や世界財政に大きな影響力を持つ組織となつた。しかし鳴月

グループもまた我々と同等の力を有している。特に鳴月龍一郎に関しては単独でそれ以上の影響力を持つている可能性がある。今回の件も鳴月龍一郎単独で行ったこととみて間違いない。私は帝グループに対してこのような仕打ちを受けて黙つているつもりはない。そこで……」

兼継はそこでいつたん言葉を切つてすべてのウインドウを確認す

る。

「帝グループ経営統括理事長の権限をもつて『プロジェクト・ニアム』の始動をここに宣言する。」

理事たちはその言葉を聞くとそれぞれ領いて次々と通信を終了させていく。それによつて兼継の前のモニターのウインドウは閉じられていきだんだんと部屋を照らす光が弱くなつていぐ。

最後のウインドウが閉じたことで闇に包まれた空間で、兼継は静かに椅子に腰をおろして背もたれに深く身を沈める。

「これで鳴月の時代も終わる。フハハッ、楽しみだよ、鳴月龍一郎。すべてを失つたお前は一体どんな顔を見せてくれるのだろうな？」

聞く者をぞっとさせるほどひの悪意を含んだその声は誰の耳に届くこともなく空氣に溶け込んで消えていく……はずだった。

「なんか楽しそうだねー、でも一人で高笑いしてるとちょっと危ない人みたいで怖いよ？」

突然入り口の方から聞こえてきた声に兼継は反射的に立ちあがつてそちらを見つめる。

急に声をかけられたこともあるのだが、それ以上に兼継はこの部屋に自分以外の誰かが入ってきたことに驚いていた。

この部屋には十一桁のパスワードと一種類の生体認証を通過しなければ入つてこれないようになつていてる。

そして現在生体認証に登録されているのは兼継と忠則のものだけ。つまり兼継がここにいる今忠則以外にこの部屋に入れるものは存在しないはずなのだ。

しかし実際に入ってきたのは忠則ではなく、そして人間でもなかつた。

兼継はそれが人間でないことを知っている。しかし人ではないにもかかわらずそれは青年の姿をしていた。不健康なほどに白い肌に琥珀色の双眸、腰のあたりまで伸ばした銀色の髪、白の布地に金の刺繡が施された司祭服に身を包んだ青年は腰に手を当てて楽しそうに兼継を眺めて笑っていた。

部屋に入ってきた青年の姿を見た兼継の眉がわずかに上がる。

「お前が、一体何の用だ」

兼継に疑わしげな視線を向けられるが、青年はその視線をまっすぐに見つめ返しながらも笑みを崩さない。

「うわお、なんか歓迎されてないみたい。なんだよー、ミレニアムを考えてあげたのはボクなんだぞ。ちょっとくらい歓迎してくれたつていいじゃないか」

満面の笑みを返された兼継はバツが悪そうに顔をそむける。

「その件は感謝している。しかし完全にお前を信用したわけではない事を忘れるな」

「ひどいー、ボクってそんなに信用ない？」

ふてくされたような顔をして腰を折つて下から顔を覗き込んでく

る青年に兼継は顎をひきつりせる。

「お前の信用なんかどうだつていい。何か用事があつたのではなかつたのか」

その言葉に青年は思い出したような顔をして兼継から顔を放す。

「おつと、やうだつた。忘れるといふだつたよ。今回まミレニアムの件で来たんだつた。それで、よつやく決心がついたみたいだね」

「ああ、決めたよ。お前と契約しよう。その代わり私の出した条件ものんでもらうが」

「フフフ、問題ないよ。その条件は必ず果たそう、約束するよ」

笑顔で了承する青年に兼継は不満げな表情を浮かべる。

「ずいぶん簡単に言つてくれるな。奴はそんなに甘くはないぞ」

「だから心配いらないつて、安心して任せなさい！ 彼だって所詮は人間なんだ。兼継クンと同じようにね」

兼継の心配を知つてか知らずか胸を張つて自信満々に語る青年に、兼継は少しの間沈黙する。

「……まあいい、とにかく条件は果たしてくれよ。それさえやってくれれば私は何も言わない」

「はいはーい、了解しましたー。それじゃ、兼継クンの方も準備お願ひねー」

ひらひらと手を振つて軽い返事をする青年の事を無視して横をすり抜け、兼継は部屋を後にする。青年は手を振つたままここにと笑いながら見送つていた。

バタン、とドアのしまる音とともに、モニターの電源も切れて部屋の中が本当の闇に包まれる。

手を下ろした青年はそのまましばらく兼継が出て行つた扉を眺めていたが、やがて天を振り仰いで静かに話し始める。

「ボクだよ、そうそう。……じつちの協力者は無事動いてくれたよ。……うん、今のところは順調だね。……いや、最後のはボクが回収に行くよ。……あ、そう? わかった。……じゃあそつちはよろしく

く

闇に包まれた狭い部屋の中に青年の声だけが響き渡る。

「……大丈夫だよ、失敗なんかしないさ。……フフフ、アハハハッ。……うん、わかつた、一応氣をつけるよ。……うん、じゃあね」

その言葉を最後に青年は口を開じ、不意に笑い始める。

「フフフ、これで準備は整つた。やつと、やつとこれで…… フフフ、アハハハッ」

完全に締め切られた部屋の中で少年の笑い声は誰に聞かれないともなく響く。

『プロジェクト・マニアム』

今、世界を揺るがす壮大な計

画が始動する。

「つてちょっと待つて!! 兼継クン鍵閉めちゃだめ!! ボク
ここから出られないじゃないかー!!」

「」の青年の絶叫も誰の耳にも届くことはなかつた。

8・1・プロジェクト・リニアム（後書き）

やっとハ話を投稿することができました。

前回の投稿から随分と間が空いてしまいましたね、すみません。

これからもいろんな感じで思に出したように投稿することができると想
うので、

よろしくお願ひします。

結局兼継は生徒の前に姿を現すことなく、なにもしないまま全校集会は終了となつた。予定より大分早く終わつてしまつたので、龍斗たちのクラスでは予定を切り上げて帝国祭の役員決めをやつていた。

「なあ、どうする? 龍斗はなんか役員やらんのかいな」

「いや、特にやるつもつはないな。少しでも自由な時間を確保しておきたいし」

「あー、遙香ひやんか。そりしゃーないわ、やっぱ心配やもんなー」

「

そう言いながら一馬は黒板に田をせざる。まだ三十分もたつていな
いのに既にほとんどの役員に名前が記入されていた。

「あと残つてんのは…… 美化委員、学園祭中止!!拾ことか誰が
やんねん。迷子委員、わざわざやる必要あるんか? 雑用委員?
なんやあれ、もつといい名前なかつたんかい。なんや、どれも面倒
なのばつか残つてるやん。案外早く終わるとか考えてたけどこれ結
構時間かかるで」

ぶつぶつと文句を言いながら黒板の文字を追つていた一馬の動き
がある一点を見つめてぴたりと止まる。龍斗がその視線の先を追つ
てみると、そこには『風紀委員』と書かれていた。与えられた枠は
男女各二名となつていて、まだ誰も名前を書いていなかつた。
じめらへ何かを考えるようにしていた一馬だったが、急にくるつ

と体を反転させると龍斗を正面から見据える。その顔は真剣そのもので、田がきりあひと輝いていた。

「……俺はやらなこや。理由せわしあも言つただろ？」「

「ええ……一人とかそんなん嫌や、薄情やで龍斗。風紀委員は見回つとこつ畠田で学園内を自由に歩き回れるんや。せやから遙香ちゃんの近くを通るルートを担当すれば少しども長く一緒にこれるといつか？」「

「確かに一馬の意図とも一理あるのかもしれないが……、しかしだな」「

「これ以上ないくらい熱心に誘つてくる一馬に龍斗はなかなか首を縊に振るつとはしなかった。しかしそこで一馬も引き下がらずと一緒にやるか、と勧誘する。それでも龍斗の反応は薄い。

そんなやつ取りを続けてくると、それを遠くから眺めていた恵美がやつてきて話に加わる。

「あら、やつてみればこじやなこの。私一年の時にやつたけど本当に一馬の言つた通りよ。ただ校内を歩いて回るだけ。そんなに大変な仕事じゃないわ」「

「せやせや、なあー龍斗ー、一緒に行ひやー。せいかくの学園祭なんやから楽しまなきや損やで。遙香ちゃんも龍斗が楽しそうにしてるほうが喜ぶと思つで」

結局一対一のよつな感じになりながら龍斗は一人の勧誘につっこひ考える。

別にやつたくないところわけではない。それこそあれは自由な時

間を多く、とは言つたものの実際は模擬店もあるので役員に入らなくとも忙しいことは忙しいのだ。

それだったら委員会に入つても同じ」とかもしれない。と龍斗は少し考えてから結論を出す。

「……そうだな、せつかく誘ってくれてるんだし、やつてみるのもいいかもしない」

それを聞いた一馬は少々大きめに喜んで大きくガッツポーズをする。

「こよつしゃ、決まりやな。ほな名前書いてくるわ。あ、龍斗も分も書いておくからええで」

立ち上がりとしていた龍斗を片手で制して一馬は黒板へと歩いていく。その背中を恵美はおじに手を当てるよしおしながら見つめていた。

「……私もやるつから。風紀委員」

『まやつ、どひどり』のようにつぶやくと恵美も一馬のあとを歩いてこき、一馬の名前の横に自分の名前を書き込んだ。

「お、なんや恵美も風紀委員やるんかいな」

「なによ、私がいやますこ」とでもあるの?」

「いやなんでそつなんねん。オレはそつこの意味で言つたんやないで。一緒にガンバろつくなー、つちゅつ意味で言つたんや」

「そ、そつ。だつたらいいのよ。あんた自分がうつコウを誘つたんだからサボんじゃないわよ」

「はは、ホンマにオレ信用されてへんな、まあええけど。今回はサボつたりせえへん。オレ今日のことでホンマに龍斗は遙香ちゃんのそばにおつたほうがええと思たんや」

セイド一馬の顔が真剣な表情へと変わった。めつたに見ることのない一馬の真剣な表情に恵美の方もかまえてしまつ。

「恵美は理事長の田尻とつたか？　あれはやっぱいで。完全に獲物を見る田やつた。遙香けやんは確実にあいつらに狙われとる。それも誘拐されてもおかしくないレベルでな。せやけど龍斗はクラスでも人気者やからな、それに仕事も早いからきっと倍近くの仕事回されるはずや。そうなつたら模擬店の準備を抜け出すことは難しくなるやろ？　せやつたらこいつ何か委員に入つたほうがよっぽど自由に行動出来ると思ただけや。風紀委員なら決まったルートを廻るだけやから龍斗の分くらいはオレが肩代わりできそりやん？　そしたら龍斗は完全フリーちゅうわけや。これで遙香ちゃんは安心やろ？」

「一馬……　あんた妙にやる奴あると想つたらそんなこと考へてたのね」

「オレかて遙香ちゃんには幸せに暮らしてほしいねん。せやけどオレじや何にも役に立てへん。そして龍斗にはそれができる。せやつたらオレは龍斗を助ける」とで結果的に遙香ちゃんを守る」とになるとんやないか、って思つただけや。なにもできへんまま黙つて指をくわえてみてるなんてオレにはできへんからな」

「……」

あまりにも真剣に話す一馬に恵美は言葉をなくしてしまった。ただその顔を見つめることしかできなかつた。

知らなかつた。一馬はちゃんと自分にできるかと考えていたんだ。

自分はあれを体験してそれから何か考えただろうか？ 少しでも自分にできることを探そうと努力しただろうか？ リュウがいれば大丈夫と考えていたのではないか？

本当に任せにしていたのはどっちだったのだろう

普段は面倒なことからはすぐに逃げてしまつし、何があるとすぐ他人に任せてしまう一馬。その一馬がここまで遥香ちゃんのことを考えているとは思つてもみなかつた。

今の自分にできるかと……

一馬が言つていたことは確かに真実だと思つ。恵美だつてできることなら守りたいと思う。しかし、それは思うだけ。龍斗は恵美たちのずっと前からそうやつて。

恵美は教室の端の席に座つて片手で頬杖をつきながら窓の外を眺めている龍斗の姿を見つめる。

なんだかその姿が急に遠い存在のように感じた。

「とまあなんかカツコニコリとつひひりと並べてみたけどやっぱだめやな。シリアルズはオレには向いてへんわ」

「……は？」

今までの真剣な様子から一転、いきなりいたずらっ子のような表情になつた一馬に、その急な空氣の変化についていけず恵美は呆けたような声を出す。

「あれ？　あれー？　なにその意外そうな反応。もしかして今の本気にしちゃつた感じか？　アホヤなー、オレがそないカツコいいこと考えるわけあらへんやん。もしかして今のオレカツコよかつた？　なあ、カツコよかつた？」

楽しそうに顔を覗き込んでくる一馬に恵美の顔がみるみる赤くなつていぐ。その肩が震えて「ことに一馬が氣づく」とはない。

「お、なんか赤くなつとる。なんや意外と照れ屋さんなんやな、隠さんでもええのにー。つてなんや、どうした？　ハリセンなんか持つて、といつかどつから出したんねんそれ。……いやまでまでまで、なぜ振りかぶる。卑まるなや、ちよつー。いやあああああ」

バッヂーン、といづ音とともに一馬の絶叫が教室内に響き渡る。それを聞いてもなお一馬を助けようとする者はこの教室内にはいなかつた。

「痛い」

ハリセンでたたかれて赤いラインの入った頬を押さえながら一馬はぼそりとつぶやく。

「あたりまえよ、全力でやつたんだから」

胸を張つて答える恵美に龍斗は苦笑を、一馬は恨めしげな目線をおくる。

「かなりいい音してたからな。たぶん廊下まで響いてたぞ」「せやせや、今回のはやりすぎやで。もう少し手加減つても」「無理ね」「つておーー即答かよーー！」

一馬は大きくため息をついて頬杖をつき、黒板の方へ目をやる。

「で、結局風紀委員の女子枠が一人残つたわけか。龍斗がやるつて知つたら殺到すると思たんやけどな」

「馬鹿ね、逆よ。みんな牽制しあつちやつて誰も立候補できなくなつてるのよ」

そう言つて恵美は教室内をぐるりと見回す。教室のあちこちに仲

*

*

*

の良い女子どうしが集まっていた。 それらがの話声は恵美たちのところまでははつきりとは聞こえてこなかつたが、『龍斗君』や『燈籠会』といふ単語が聞こえてくるあたりで、何を話しているのか想像するのは容易だつた。

「（）のままだと決まんないんとかやつかな。 恵美は誰か誘う奴はおらへんのか？」

「そうね、特にこの入つていうのはいないわ。 それにあんたにはこの状況で誰か一人を選ぶ勇氣ある？」

「……無理やな。 きっとクラスの女子全員から反感買うことになるで」

「でしょ、私にもさすがにそんな勇氣ないわ。 これからずっとクラスの中で肩身の狭い思いをするなんていやよ」

「せやなー。 けどどうする？ 」この状況作ったのオレらやし。 でも十分居心地悪いんやけど。 おもにオレに向かう女子の視線が痛い

「まあなんとかなるわよ。 まだこのクラスには一人救世主が残つてるわ」

「救世主？ 誰やねんそれ」

一馬が不思議そうな顔で聞き返したところで、ズバーンという轟音とともに力いっぱい教室の扉が開け放たれた。 クラスにいた全員が驚いてそちらに目線を移す。

「おはよー諸君。遅れてごめんなんだぞー」

直前の行動とは正反対の間延びした少女の声がしんと静まり返った教室に響き渡る。

ポニーテールにまとめた髪を揺らしながら教室に入ってきた少女は周囲の空気を全く気にせずに自分の席にかばんを置くと、まっすぐ龍斗たちのほうに歩いてきた。

「おはよー、いやー大変だつたんだぞー。たつた三秒遅れただけでー、反省文百枚だつてそー。これってひどくないかー？」

「あ、ああ。そうだな。」

何事もなかつたかのように話しかけてくる少女に頬をひきつらせながらも龍斗はなんとかこたえる。

「そうだろー？　でも反省文で終わつてよかつたーつて感じなんだよなー。校内掃除とかだるいし。あれ？　といひでみんなはなんで固まつてるんだー？　何かあつたのかー？」

カクン、ヒ首をかしげる少女に一馬は脱力する。

「まず最初にそれに気づけや。つてか誰のせいだにうなつたと思ってんねん」

「お、帝国祭の役員決めかー。もうそんな時期なんだなー」

「人の話聞けやー。あんたのせいやでー。ちょっとは自覚せー！」

自分で質問をしておいてあつたりと次の話題に切り替える少女に

一馬は即座にシッ「」む。至近距離で叫ばれているにもかかわらず少
女には全く動じた様子はなく、一馬を無視して「むー」と呻りなが
ら真剣に黒板の文字を追っていた。

「無駄よー馬。楓はいつもマイペースなんだから」

「確かに楓は昔からマイペースだったよな。俺も最初会ったときは
会話するのに苦労したよ」

「ん、褒められてるのかー？　じゃあとりあえず喜んでみる。わー^{かえで}
い」

「いや誰もほめてへんから。なんで今のは会話からそんな解釈ができる
んねん」

「無駄よー馬。楓はいつもマイペースなんだから」

「同じ言葉で突っ込まれた！！　その関心のなきせつなシッ「」や
めてー！」

「私もなんか役員やりたいべー。なんか空いてるといなーかー？」

「これだけ騒いでも完全無視！？　……もつぇえ。オレなんてどう
せ永遠に空氣扱いええんや……」

膝を抱えて体育座りの恰好で床に座り込む一馬だったが、楓はそ
れに見向きもしない。

「お、風紀委員があいてるー。誰もやらないならわたしがやー」

あまつさえその横をすり抜けて黒板へと歩いていく始末。さすがの一馬でも精神的に耐えられなかつたのだろう。もつ声をかけるのもはばかられるべつに落ち込んでしまつていた。

「なあ、龍斗。オレ……嫌われてんのかな？」

一馬は顔を両腕につづめたまま脱力しきつた声で呟く。

「ま、まあそんなに落ち込むなつて。楓はいつもあんな感じだ。あんまり気にしないほうがいいぞ」

その言葉に一馬は体育座りのまま顔だけをあげて龍斗を見上げる。

「じゃ、じゃあオレは嫌われたわけやないんや」「なんだ一馬いたのかー、といつか何やつてるんだー？ そんなとこに座つてると通行の邪魔だぞー」……もつぶやえ。オレなんてどうせ一生こんな扱いのまま終わるんや」「や

戻ってきた楓の一言によつて再び一馬はふてくされるのであつた。

* * *

「んー、終わったー。よつしゃ、今日の授業もこれで終了や。龍斗、帰るでー」

チャイムが鳴ると同時に一馬は椅子から立ち上がり伸びをする。

「いや、この後委員会があるだろ。まだ帰れないぞ

「ああ！ そういうやそんのもあつたな、すっかり忘れとつたわ。で、どこに集まるんやつたつけ？」

「実は俺も正確には覚えてないんだよな。確か四階の……「第八講義室よ」そつ、第八講義室だ。ありがとつ恵美」

後ろ彼聞こえた恵美の声に、龍斗は振り向きながらお礼を叫ぶ。「どういたしまして。それにしても龍斗が忘れるなんて珍しいこともあるのね。一馬は論外、つこせつき今回は忘れないって言つたのは誰だったかしら」

「あははー、やっぱ覚えてられんかったか。まあオレが忘れても恵美が覚えるから大丈夫や。信頼してるで、恵美」

「変なところで信用しないでよね。ちよつとは自分で努力しなさりゅうといー、一緒に委員会行くぞー」……相変わらず楓はマイペースね

話の流れを完全に無視して割り込んできた楓に恵美はがつくりと肩を落とす。しかし当の楓自身にはまったく自覚がないので不思議そうに首をかしげていた。

「ま、まあみんな集まつたことだし行くか。ここからだとちよつと歩くしな

「せ、せやな。早めに出たまつがええや。まないこか

といつあえず話を先に進めることで一人はこの空氣を脱することと

した。幸いなことに楓もこれに乗つてくれたようなので龍斗はほつと胸をなでおろす。しかし楓から帰ってきた反応は龍斗たちの予想の斜め上を行くものだった。

「あー、そうそう、第八講義室だつたよなー。教えてくれてありがとうございます。じゃ、講義室で会おーか。またー」

ひらひらと手を振つて楓は一人で教室を出て行つたしまつたのだ。楓の突飛な行動には多少の耐性がある龍斗たちでさえもこれにはさすがに啞然としてしまつた。

「え？ 一人で行くん？ てかいま自分から一緒に行こうと言つてなかつたか？」

「確かに言つてたよな。しかも俺は名指しで呼ばれてた氣がするんだが」「

「ま、まあそれが楓なのよ。ほら、私たちも行きましょ」

予測のできない楓の行動にしばらく固まつたままだつた三人だが、気を取り直して教室を後にした。

9・3・風紀委員会（前書き）

ようやく九話まで来たところなのですが、この辺りで私が投稿しているもう一つの作品である「1人と999人の戦争」の方を先に仕上げてしまおうと思つています。

ですので、「ETARNA STORY」はしばらく更新できないことになるかと思います。本当に申し訳ございません。

その埋め合わせとは言いませんが、「1人と999人の戦争」の方もぜひ読んでいただけると嬉しいです。

『では全員集まつたよつなので風紀委員会を始めたいと思つ』

黒板の前に立つてゐる風紀委員長の声が教室内に響き渡る。といつても別に叫んでゐるわけではなく、単にマイクを使って話しているだけのことだ。もともと複数学級の合同授業のために造られたこの第八講義室は通常の教室の約五倍の広さがある。そのためマイクなどを使わないと教室の奥まで声が届かないのだ。

『まず風紀委員の仕事について説明する。今から配布するプリントを見てくれ』

委員長がそつと、最前列に座つていた数人が立ち上がってプリントを配り始める。おそらく彼らも副委員長や書記といった何かしら責任者側の人間なのだろう。

龍斗が何となくその様子を眺めていると、横に座つている一馬が肘でつついてきた。

「なあなあ、左の列のプリント配つてる子かわええと思わへん?』

その言葉に龍斗は片手で頬杖をつきながらため息をつく。

「一馬、お前はそつこいつ」とぱりかりに興味がいくんだな

「なんや、美少女に心ときめくのは男の性やないか。龍斗もそつ思
うやん?』

「いや、特に思わないが

「あかんなあ、あかん。もつと青春せなあかんで！ そんなんじや
絶対彼女できへんわ」

「こや、別にほしこと想つたことないんだが」「

興味のなさうな龍斗の返答に一馬は口をどがいた。

「なんや食に付き悪になー。男同士でいつも普通はもつ
と盛り上がるもんなんやけど」

「ナウにうものか？ 別に面白ことは思わないんだが。……ああ、
あらがとう」

話してこぬうちに龍斗たちのところにもプリントを持った女子生
徒が回ってきたので、龍斗は礼を言つて一馬と二人分を受け取る。
するとその女子生徒はわずかに頬を染めて い、いえ。と短く答え
ると逃げるよつにして次のの方へと歩いて行つた。

「せう、一馬の分。どうせすぐになぐすと想つけどな

いやつ、とこだすりうけのよつな笑みを浮かべてプリントを差し
出す龍斗に一馬は恨めしげな視線を送る。

「……ホンマ龍斗は無自覚に人の好意を集めのプロやな

「は？ なんのことだ？」

「いや、ええねん。気にせんとこでや

ネガティブなオーラを放つ一馬に龍斗はわけがわからず「首をかしげた。

「ああ、生まれ変わるならオレは龍斗になりたいわ。母ちゃんは美人やし父ちゃんは社長やろ？ 何より遥香ちゃんみたいなカワいい妹もいて生まれながらの人生の勝ち組やん」

「ぶつぶつと念仏でも唱えるかのよつてつぶやきながら一馬は机に突っ伏す。

「何を言つているのかさっぱりだが、俺になつたつていいことばかりじやないと思つぞ」

「なんや、不満なことなんて何もないやう？」

「俺になつたら祖父ちゃんの修行がセツトでついてくる」

「……あかん、そら勘弁してや。あんな修行三日で死ねるで」

『おいやこ、私語は慎むように。そう、お前たちだよ鳴月、篠原。風紀委員は全校生徒の規範にもなるんだ。気を引き締めて取り組みなさい』

マイクで拡大された委員長の注意が突然飛んできたことに、二人はびくつ、と肩を震わせて驚いた後顔を見合わせる。名指しで注意されたことで教室内にわずかに笑いが起こり、委員長はそのことに眉をひそめる。

「やつたー、ちょっと田立てたでー。これで誰かカワイイ子が振り

向いてくれへんかなー』

『……ホントお前はそればつかだな』

ぐでー、と机に伏せたまま投げやりな声でそれでも貪欲に美少女を求める一馬に、龍斗はただため息をつくことしかできなかつた。

『まあいい、一度はないぞ。それでは全員にいきわたつたようなので再開する。まず主な活動だが基本は校内の巡回だな。ルートと時間を決めて各自一人ペアを組んで全校を回つてもらう。ペアは各自自由に決めていいぞ。じゃあ次』

淡々とプリントの文章を読み上げていく風紀委員長の声だけが教室内に響く。

『風紀委員の仕事は大きく分けて四つ。服装や頭髪の乱れのチェック、校内の破損部位の報告、クラス展示および模擬店の進行状況の確認だな。まあこれらは形式的なものでかまわん。もともと我々がやらなくて済むならまだしも殴り合いを始める輩までいる始末だ。これの仲裁が最も多い仕事となるだらつ。一応マニュアルは組んでるがそんなものは当てにならん』

委員長はそこでこいつたん言葉を切つて教室内をぐるりと見回す。

『生徒同士のこざりざの仲裁。これがもつとも厄介な仕事だな。帝国祭準備期間及び帝国祭期間中は頻繁に学生間の喧嘩が起つ。言い争いで済むならまだしも殴り合いを始める輩までいる始末だ。これの仲裁が最も多い仕事となるだらつ。一応マニュアルは組んでるがそんなものは当てにならん』

『……じやあそんなもん渡すなや。資源の無駄やないか』

『黙れ篠原。一度目はないといったな。貴様は後で私のところへ来い』

本当に小さな声でつぶやいたのにかかわらず委員長には聞こえていたようすで、ピンポイントで厳しい叱責が飛んできた。まさか聞こえるとは思っていなかつた一馬は一瞬だけ驚いて顔を上げ、何があつたのかわからないような顔をしていたが、委員長と田が合いつづくにまた机に突っ伏す。

いつもなら騒ぎ出す一馬が反論しなかつたのをみて、龍斗は意外そうな顔を一馬に向ける。

「今日はやけに素直だな」

「いや、なんとなくあれには勝てへんよつな気がしてな。恵美と同じ空気を感じるねん」

「ああ、なるほど」

龍斗が頷いて前に視線を戻すとむづき委員長と視線がぶつかつた。じつとこちらを見つめてくる委員長に龍斗もなんとなく田をさらすタイミングをつかめずにはいると、突然委員長の口元が「一イ、と不気味につりあがつた。

『鳴川、お前もだ。一馬を連れて私のところへ来い。たっぷりとお話ししようじやないか』

委員長の反論は許さないといつ声に龍斗は自分の背中に何か冷たいものが走ったのを感じた。

『まあそれはいいとしてだ。くそ、奴らのせいで話が進まんな。とにかく君達には喧嘩の仲裁を頑張つてもひつ。やり方は何でもいい。話し合いなり先生を呼ぶなり全員腕つ節で黙らせるなりしてとりあえず喧嘩を止めるのが仕事だな。早速明日から始まるからペアは今田中に決めておくれよつ。以上だ』

そう言つて委員長は壇上から降りて講義室を出て行つた。それに続いて他の生徒たちもざらざらと講義室を後にしていく。

「はあ、やつと解放されたわ。ほな帰るで」

「委員長のところへ行かなくていいのか？」

「わざわざ自分から怒られに行くほど暇じやないねん。せやつたら龍斗だけ行つたらええやないか。オレは帰るで」

そう言つて立ち上がりつとした一馬だったが立ち上がる前に頭を強く押されてまた座りこんでしまつた。

「こつた！ なんや、だれやねん！」

頭をさすりながら後ろを振り返つた一馬の顔に映つたのは……

「篠原、この私から逃げようとはいいく度胸じやないか。え？」

先ほど出て行つたはずの委員長の姿だつた。

「え？ 委員長？ だ、だつて今さつを出て行つたやないか。なんでここおんねん！」

そんな一馬を完全に無視して委員長は龍斗の方へ顔を向ける。

「もちろん鳴円も忘れていないよな？」

満面の笑みで、しかしあつとも笑っていない田を向けられた龍斗はただうなづく」としかできなかつた。

* * *

「……何やつてんのかしらあいつら」

「あつははー。なんか面白ことになつてるなー」

三人のやり取りを遠くから眺めていたこの一人もなぜか一緒に連れて行かれたのは余談である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7072j/>

ETARNIA STORY

2010年10月10日05時18分発行